

ありのままの **わたし**
大切な **あなた**

～子どもと保護者のエンパワメント～

ありのままのわたし 大切なあなた

～子どもと保護者のエンパワメント～

CONTENTS(目次)

●発刊にあたって	1
●冊子の構成と使い方・用語解説	1
●乳幼児期の子どもの人権を「守り」「育む」	6
●活動・学習プログラム	11
乳幼児向けプログラム・おおむね0歳～1歳半	12
コラム 1 受け止められる中で育つもの (P13)	
① 一本橋 (P14、15) ② ことりことり (P16、17) ③ ばあ! あそび (P18、19)	
④ 絵本「いないいないばあ」(P20) ⑤ まねっこあそび (P21)	
乳幼児向けプログラム・おおむね1歳半～3歳	22
コラム 2 「出会い・共に楽しみ・表現し・ぶつかり合う」中で育つもの (P23)	
① まてまて遊び (P24、25) ② ごっこ遊び (P26～29)	
③ あぶくたつたにえたつた (P30、31) ④ コーナー遊び (P32、33)	
乳幼児向けプログラム・おおむね4歳～6歳	34
コラム 3 「いろいろな仲間とともに生きる」中で育つもの (P35)	
① しっぽとり (P36、37) ② 手遊び「アルプス一万尺」(P38、39)	
③ ふたりぐみ電車リレー (P40、41) ④ なべなべ底抜け (P42、43)	
⑤ 「〇〇国フェスティバル」(P44～47) ⑥ 「みえないってどんなこと？」(P48～51)	
乳幼児と保護者向けプログラム	52
コラム 4 子どもを尊敬するってどんなこと? (P53)	
① 身近な素材であそぼう ① (P54～57)	
② 身近な素材であそぼう ② (P58～63)	
③ 手づくりおもちゃをつくろう ～交替で見守り参加～ (P64～67)	
保護者向けプログラム	68
コラム 5 「おとな自身」を見直す (P69)	
① 子どもの声を聴く (P70～75)	
② 子育て、楽しいですか? わたしも大切、子どもも大切 (P76～79)	
③ 子育てしやすい社会って?! (P80～85)	
●参考資料	86
●アンケート	87

発刊にあたって

私たちの誰もが、一人ひとりが持っている可能性を最大限に発揮し、喜びを実感できる社会で生きたいと願っているのではないのでしょうか。しかしながら、性別や障がいの有無、社会的出身や国籍、人種や民族などを理由に、人としての誇りや可能性が奪われてしまう差別や偏見がなおも存在するのが現実です。

そうした差別や偏見をなくし、人と人との対等に手をつなぐことのできる社会の実現を目指し、人権教育教材の作成に過去9年間取り組んできました。これら人権について多様な角度からとりあげた教材は、行政機関をはじめ企業、地域など様々な場面で活用され一定の成果を上げてきたと考えています。

今回、人権学習シリーズvol.10の発刊にあたって、差別や偏見が世代間で再生産されていくプロセスを考えた時、乳幼児期にこそ、自他ともに尊重するという体験を十分積み重ね、人としての根っこを耕していくことが大切であるという思いを強く持ちました。差別や偏見とは無関係であった0歳の子どもが、生活の中でおとなが子どもにかけ言葉や行動を介して、あるいは社会の価値観を無意識のうちに身に付けていく過程において、5歳にもなれば、偏見の芽を身に付けているということが少なくないからです。

この教材では、就学前の子どもを中心に、その発達段階に応じ、遊びを通じた人権感覚を育むプログラムやおとな（保護者）のエンパワメントをテーマとしたプログラムを紹介しています。家庭や地域、子育て支援の場、保育所・幼稚園などでの活用を通じて、おとなの子どもへの関わりや、おとな自身が自分自身を振り返るきっかけとなることを願っています。

この教材が、ありのままの自分が肯定され、人を大切に思える心を育み、子どももおとなもエンパワメントされる一助になれば幸いです。

■ 冊子の構成と使い方

1. 冊子の構成

この冊子は「論文」と「プログラム」で構成されています。

(1) 乳幼児向けプログラム

① 3つの年齢区分

乳幼児期を「関係の変化」「人権に関わる意識の育ち」に着目し、「0歳～1歳半」「1歳半～3歳」「4歳～6歳」に区分し、活動を紹介しています。「0歳～1歳半」はおとなからしてもらう時期、情動的な一体感を通して人への安心感・信頼感が育つ時期。「1歳半～3歳」はおとなとともにする時期、他の子どもへの関心が育つ時期、身体諸機能の発達で自信が育つとともに、「違い」に気づきだす時期。「4歳～6歳」は子ども同士の関係が深まる時期、身体の諸機能の基礎ができるとともに、自分と他の子どもとの違いを認識する時期、ととらえました（年齢区分ごとの「コラム」で、子どもの成長とおとなの関わりについて書いています）（P13、23、35）。

年齢区分別プログラムになっていますが、該当する年齢でしかできないものではありません。子どもの興味に合わせて選び、子どもの反応などによって工夫し、楽しんでください。

② 3つのキーワード

おとなとの関わりを軸として仲間との関わりも広がるなかで、育ってほしい「差別や偏見をなくしていく力」を「人権力」と表現し具体的な遊び・活動を通して紹介しています。

人権力は「尊重」「公平」「反偏見」の3要素からなり、プログラムではキーワードとして示しています（P7参照）。

③多様な場での活用

家庭や地域、子育て支援の場、保育所・幼稚園など、乳幼児がいる場であれば、基本的にどこでも活用できるものです。

(2) 乳幼児と保護者向けプログラム

子どもと同じ目線に立って「一緒に遊びを楽しむ」、そして「自分の子ども以外にも目を向ける」ことをねらいに、ファシリテーター向けに手順を記したプログラムです。

子育て支援の場や保育所・幼稚園の保護者参加の行事などでも活用できます。

(3) 保護者向けプログラム

子どもたちの人権意識の土台になる「自分が尊重されている」とはどういうことかを、保護者を始めおとなが考えるきっかけづくりのプログラムです。

また、性別役割分担意識や「いい母親・父親」像など常識を問い直し、子育てしやすい社会について考え合うプログラムです。

子育て支援の場や保育所・幼稚園のクラス懇談会、また講座や研修などで活用できます。

(4) 論文・コラム

プログラムを通して伝えたいこと、一緒に考えてほしいことを論文（P 6～P10）と各プログラムのコラムとして示しています。

プログラムと併せて読むことで、プログラムの進め方や応用の仕方について理解が深まります。

2. 用語の説明

- ・キーワード プログラムで身に付けてほしい内容を単語で表しています。
- ・ね ら い キーワードをプログラムに即して具体的に説明し、プログラムで何を身に付けてほしいのかを表しています。
- ・対 象 乳幼児向けプログラムはおおよその該当年齢を示しています。
- ・所 要 時 間 プログラムの進行に要するおおよその時間を示しています。
- ・プログラムのおおまかな流れ
乳幼児と保護者向けプログラム・保護者向けプログラムについて構成するアクティビティ名とそのねらい、進行に要するおおよその時間を示しています。
- ・準備するもの プログラムに必要な材料や道具などを示しています。

3. 会場の作り方

☆乳幼児向けプログラム

- ・動きの少ないプログラムは、どのような場でも少しのスペースで楽しめます。
動きのあるプログラムは、子どもの動きを予測して室内、室外ともに足元や周囲に危険物がないかを確認めます。
- ・ごっこ遊び、コーナー遊びは、家庭では小さなスペースでもいいので、ざぶとんや小さなシートなどを置いてあげると、より遊びに集中できるでしょう。子育て支援の場や保育所・幼稚園では、年齢に応じて必要な広さが変わってきます。

☆乳幼児と保護者向けプログラム

- ・子どものけがを防止するとともに、参加者の動きをスムーズにするために障害物がない、なるべく広いスペースを設けることが必要です。そのためにも、参加者の荷物を置く場所を設けます（隅っこに机、あるいは敷物を用意）。

- ・机・イスは必ずしも必要ありません。みんなが座ることができる広さの敷物があればよりよいでしょう。敷く場合は、子どもたちが足を引っかけないように端を固定するなど配慮が必要です。

☆保護者向けプログラム

- ・参加者の荷物を置く場所を設けます（隅っこに机、あるいは敷物を用意）。
- ・「子どもの声を聴く」は、4～6人のグループになるように机とイスを用意します。他のプログラムは、最初はイスのみを用意します（用意の仕方はプログラムの記載どおり）。
- ・活動をする時に動いたり、あるいは途中で机を必要とするプログラムもあるので、スペースに余裕のある会場を用意します。

用語解説

●ワークショップ

ワークショップ（workshop）とは、もともと「職場」「作業所」「工房」を意味し、みんなで意見交換や共同作業を行いながら進める「参加体験型」学習のことをいいます。指導・被指導の関係で学ぶ学習でなく、参加者が積極的に他者の意見や発想から“学びあい”、最後にみんなで自らの“ふりかえり”をするという、学習のプロセスでの学びを大切にします。問題解決を図るとともに、態度や技能（スキル）を身につけられるという特徴があります。

●ファシリテーター

ワークショップを進行する人をファシリテーター（facilitator）と呼んでいます。単に進行役といってもよいのですが、「活性化させる」という意味を持つファシリテーターの方が、実際に期待されている役割に近い言葉になっています。話し合いの交通整理をする議長役だけでなく、話し合いの素材になるものを用意し、そして時間管理を行いながら全体を進行する役目をするなど、さまざまな複合的な能力が必要とされています。

●エンパワメント

差別など（社会的抑圧など）により弱者の立場に立たされてきた個々人が、その内在する能力、行動力、自己決定力を取り戻すことです。

プログラム活用ガイドンス（ねらい・活用の場）

年齢	プログラム	育てほしい内容・ねらい		使ってもらう場所		
				保育所(園) 幼稚園	子育て広場 子育て講座	家庭
乳幼児向けプログラム 0歳～1歳半	① 一本橋	尊敬・公平 ※集団の場では 順番など、公平も入ってきます	・自分の気持ちを表現する力や意欲、おとなへ働きかける力を育む。	○	○	○
	② ことりことり	尊敬・公平 ※集団の場では 順番など、公平も入ってきます	・自己肯定感や人への信頼を育む。	○	○	○
	③ ばあ！遊び	尊敬・公平 ※集団の場では 順番など、公平も入ってきます	・大好きなおとなを誘う力や遊びへの意欲を育む。	○	○	○
	④ 絵本 『いないいないばあ』	尊敬	・他者への関心を育む。	○	○	○
	⑤ まねっこ遊び	尊敬・公平 ※集団の場では 順番など、公平も入ってきます	・大好きなおとなを誘う力や遊びへの意欲を育む。	○	○	○
乳幼児向けプログラム 1歳半～3歳	① まてまて遊び	尊敬・公平	・共感や協力する力を育む。	○	○	○
	② ごっこ遊び	尊敬・公平 反偏見	・自分なりの遊び方をみつける力を育む。 ・友だちとのやりとりを楽しむ力、イメージを膨らませる力を育む。 ・友だちと誘い合う力を育む。 ・相手の気持ちに気づく力を育む。	○	○	○
	③ あぶくたつた にえたつた	尊敬・公平	・イメージをふくらませる楽しさを育む。 ・共感や協力する力を育む。	○	○	○
	④ コーナー遊び	尊敬	・自己肯定感を育む。 ・友だちの好きな遊びに気づく力を育む。	○	○	○
乳幼児向けプログラム 4歳～6歳	① しっぽとり	尊敬・公平 反偏見	・仲間と協力する気持ちや力、共感する力を育む。 ・不合理に気づき、行動する力を育む。	○		
	② 手遊び 「アルプス一万尺」	尊敬・公平	・人（おとな・友だち）の心地よさや人への信頼、安心感を育む。	○	○	○

年齢	プログラム	育ってほしい内容・ねらい	使ってもらう場所		
			保育所(園) 幼稚園	子育て広場 子育て講座	家庭
乳幼児向けプログラム 4歳～6歳	③ ふたりぐみ電車リレー	尊敬・公平 反偏見	・友だちと一緒に考える力を育む。 ・走るのが遅い子や走れない子への理不尽な発言をおかしいと感じ、表現する力を育む。	○	
	④ なべなべ底抜け	尊敬・公平	・友だちと協力してできた達成感を育む。 ・自己肯定感や友だちと認め合う力を育む。	○	○
	⑤ 「〇〇国フェスティバル」	多文化・尊敬 公平・反偏見	・多様な文化背景(国籍・民族・人種・宗教・言語)を正しく理解する力を育む。 ・それぞれの文化への自覚と誇りを高める。 ・ともに生きる仲間として行動しようとする力を育む。	○	○
	⑥ 「みえないってどんなこと？」 ～感じよう！知り合おう！～	障がい児共生 尊敬・公平 反偏見	・「見えない世界」を体験し、「見る」こと以外の世界の大切さを知り、共感し、行動する力を育む。 ・自分への誇りや自己肯定感を育む。	○	○
乳幼児と保護者向けプログラム	① 身近な素材であそぼう①	自己決定 自己選択 対等	・気持ちが通じあう体験を通して、おともどもどももリラックスして楽しむ。	○	○ ※
	② 身近な素材であそぼう②	楽しさの共有 協働	・子どもをみんなで見守り、いろいろな遊び方や過ごし方を認め合う。	○	○ ※
	③ 手づくりおもちゃをつくろう ～交替で見守り参加～	対等・安心 信頼	・他の子どもを見守る経験から他の子ども、自分の子ども大切と感じる。	○	○ ※
保護者向けプログラム	① 子どもの声を聴く	自己肯定 自他尊重 子どもの人権	・自分の気持ちを感じる。 ・子どもの気持ちやおとなの気持ちを考える。 ・子どもの権利条約を知り、子ども自身の感情に気づく。	○	○
	② 子育て、楽しいですか？ わたしも大切、子どもも大切	エンパワメント 自己尊重 自己肯定	・子育て中の親が自分を肯定できるようになる。 ・「親としての自分」だけでなく、一人の個人としての自分を確かめる。	○	○
	③ 子育てしやすい社会って？	子育ての社会化 抑圧の内面化 個人的なことは政治的なこと	・「母親像」「父親像」を問い直し、無意識に自分をしばっている価値観に気づく。 ・子育てしやすい社会にしていくために大切なことを考える。	○	○

※ 紹介している遊びは可能

乳幼児期の子どもの人権を「守り」「育む」

常磐会短期大学 ^{しめだ} 卜田 真一郎

乳幼児の人権を考えるために必要な2つのこと

乳幼児の人権を考えるためには、次の2つの課題を意識することが必要になります。1つは、「子どもの人権を守る」ことに関わる課題であり、もう1つは「子ども自身の人権力を育む」ことに関わる課題です。このことについて考えてみましょう。

【1つめの課題：「子どもの人権を守る」】

1. おとなの子ども観が問われています

「子どもの人権を守る」という課題は、「一個の人格を持った存在」として子どもを尊重し、差別・貧困・虐待・戦争などの子どもの人権を脅かす事態から子どもを守るためにどうすべきなのかを考えることを意味しています。

子どもは、社会の中で弱い立場にいます。そして、周囲の環境や社会の中にあるさまざまな矛盾の影響を直接的に受けやすい存在です。戦争の犠牲になるのは一番弱い立場にいる子どもたちですし、差別や貧困の結果、さまざまなしんどさを抱えさせられている子どもたちや、豊かな育ちの機会を奪われている子どもたちもいます。虐待や体罰を受けることによって、身体的にも、精神的にも傷ついている子どもたちもいます。そして、子どもたちをこうした状況に追い込んでしまうのは、他ならぬ「おとな」や「おとながつくっている社会」なのです。私たち「おとな」は、自分たちが子どもの人権を侵害する可能性をもった存在であることを自覚しておく必要があります。

おとなが「子どもの人権を侵害する存在」ではなく、「子どもの人権を尊重し、守ることができる存在」となるためには、おとなの子どもに対する見方・とらえ方（子ども観）が問われます。「おとなが思いどおりにしてよい存在」「思いや主張など聞く必要はない存在」「言葉では分からないだろうからたいてい理解させないといけない存在」として子どもをとらえている中では、子どもの人権を尊重し、守ることはできません。子どもは「小さくても、1人のヒトとして尊敬される存在」であり、「自分の思い・意志をもった存在」であるとしてとらえ、「尊敬の対象」として子どもを見ることが、おとなが、子どもの人権を尊重し、守ることができる存在になるための第一歩です。

2. おとな自身も生き生きすることが大切

もう1点、「子どもの人権を尊重し、守ることができる存在」になるためには、おとな自身が置かれた状況のありようも重要になります。子どもと共にいるおとな自身の人権が尊重されず、さまざまなしんどさを抱えさせられている中では、そのしんどさがより弱い存在である子どもに向いてしまうことも起こりえます。子どもとともにいるおとな自身が置かれた状況がより良いものとなり、人としての尊厳が守られ、生き生きとした状態にあることは、子どもの人権が守られるために必要な条件です。このことについては、この論文の後半で考えてみましょう。

【2つめの課題：「子ども自身の人権力を育む」】

1. 乳幼児期は偏見とは無縁の時期ではありません

「子ども自身の人権力を育む」という課題は、子どもたち一人ひとりに、人権を大切にする心を育て、人権を守るために行動できる力をいかにして育むのか、ということの意味しています。子どもは人権を守られる存在であると同時に、現在そして未来の「人権の担い手」、さまざまな人たちがともに暮らしていける「共生社会の担い手」でもあります。そうした力は乳幼児期から育まれていく必要があります。

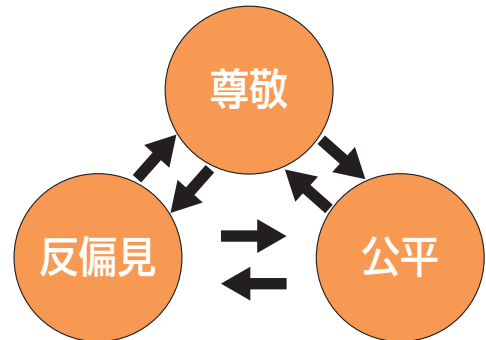
乳幼児は、社会的な偏見や差別とは無縁の存在ではありません。アメリカにおける研究では、「乳

児は、早ければ6ヶ月頃から肌の色の違いに気づきはじめており、3歳頃までに肌の色への社会的偏見を吸収し、白い肌には肯定的に、黒い肌には否定的に反応するようになる（L.ダーマン・スパークス 1989／1994）」といった具体的な結果が示されているように、乳幼児は、社会的な偏見につながるような物事の見方、とらえ方を少しずつ吸収していきます。だからこそ、乳幼児期からの人権保育・教育が必要となるのです。

2. 子どもに育みたい「3つの人権力」

では、子どもに育みたい「人権に関わる力（＝人権力）」とは、具体的にどのようなものなのでしょうか？ここでは、『子どもの人権力を育てる一尊敬を軸にした人権保育』（玉置哲淳）において提起された「人権力のトライアングル」の考え方にに基づき、子どもに育みたい「人権力」を概観していきましょう。なお、この「人権力のトライアングル」の考え方は、本書で提起されるさまざまなプログラムの土台となる考え方となっています。

人権力を育てるとは、「人権の感性」を育てるとともに、「人権を守るために行動できる力」を育むことを意味しています。その上で、人権力の内実として「尊敬」「公平」「反偏見」の3点を挙げています。



人権力のトライアングルのイメージ
『子どもの人権力を育てる一尊敬を軸にした人権保育』
玉置哲淳 著

①人間を尊敬する力（尊敬）

「尊敬」とは、「自分のことが好き」「仲間のことが好き」という気持ちを持ち、自分や仲間の尊厳を守るために行動できる力を育てることで、「自己への尊敬」「他者への尊敬」「生命への尊敬」「言う力と聞く力を持つこと」の4点に整理されています。

「自己への尊敬」とは、子ども自身が自分のことを好きになり、大切にできることを意味しています。そのためにも、子ども自身が、自分は価値のある存在だ、自分はなかなかいいところがある、自分は自分のことを決められる、という気持ちを持ち、不当な扱いをされた時にはそれに対抗していける力を持つことが重要になります。

「他者への尊敬」とは、仲間のことが好きになり、大切にできることを意味しています。そのためにも、仲間に関心を持ち、友だちの言うことを聞こうとする、仲間のいいところや気持ちに気づき、その子の立場に立てる、といった力を持つことが重要になります。

「生命への尊敬」とは、自分の命・他者の命・動植物の命を大切にできること、命を支えてくれる人の存在に気づいたり、命を大切にするために必要な行動ができることを意味しています。

「言う力と聞く力を持つこと」とは、自分や他者への尊敬を具体的に表した行動として、自分の思いを言うことや、友だちの発言を聞こうとすること、一人ひとりの言うことを値打ちのあるものとして受け止めようとするなどことを意味しています。

「自己への尊敬」と「他者への尊敬」は、コインの表裏の関係にあります。周囲の人から尊敬されることによって初めて、人は自分のことを尊敬することが可能になります。お互いに認め合い、受け止め合える関係を作ることが重要になります。

②公平性の獲得（公平）

さまざまな人権や差別に関わる問題には、「公平・不公平」をめぐる問題が存在しています。ある属性を持っていることを理由に、他よりも不当に低く取り扱うことが差別であると考えた時、こうした不当な扱いに気づき、改善しようとする力を育むことは重要です。このように、不公平な状態に気づき、その改善のために、順番ですることや、みんなが納得するような役割分担ができるなど、公平ということの意味が分かり、その論理が使えることが、「人権力」の2つめの柱になります。

こうした「公平・不公平」の問題は、子どもたちの生活や遊びの中で、具体的な問題として存在しています。遊びの役割分担の中で（ごっこ遊びで、いつも「いい役」をしている子は？いつ

も自分がやりたい役ができない、あるいは主張できていない子は?)、おもちゃの使い方の中で(いつも使いたいおもちゃを使えている子は?いつもがまんしている子は?)、順番が問題になる遊びの中で(いつも「先頭」をしている子は?いつもがまんしている子は?)、その他さまざまな場面で子どもたちは「公平・不公平」の問題に接しています。

公平性の獲得のために大切なのは、子どもたちがだんだんと公平ということの意味が分かり、自分たちなりに公平な状態を作り出そうとすることができることです。

そのためには、まず、遊びや生活の中で「自分はこうしたい」という自己主張をすること、そこでぶつかり合いが起こることが第一歩です。そうしたぶつかり合いをおとなの力を借りながら解決していくことを通じて次第に、順番・交代・共有といった「みんなが納得するやり方」を追求し、自分たちなりの問題解決ができるようになることが大切です。

③偏見をなくす力(反偏見)

乳幼児であっても、社会的な偏見と無縁の時期でないことは、先に触れたとおりです。子どもたちは、社会の中にあるさまざまな偏見がかった見方を次第に身に付けていってしまいます。そうした見方に対し、偏見を「おかしい」「いやだ」と感じ、偏見をなくそうと行動することが、「反偏見」の力です。こうした力を育てていくためには、さまざまな人々と「出会い」、その「思いを知ること」、人々が持つさまざまな違いを「正確に知ること」、さまざまな文化の「良さに出会うこと」などが重要になります。こうした「出会い」や「正しい理解」が、偏見がかった見方に出会ったときに、おかしいと指摘し、偏見をなくすために行動できる力の土台を形成します。

こうした「尊敬」「公平」「反偏見」の3つの力は、相互に関連し合いながら育っていきます。また、年齢によって育みたい力も変化していきます。ここで提起された内容を意識しつつ、各年齢においてどのような人権力を育てたいのかを意識し、実践へとつなげていくことが大切になります。

本書で提起されている乳幼児向けプログラムは、この「人権力のトライアングル」を土台とし、それぞれの活動でどのような人権力を育てようとしているのかを明記しています。実践の指標としていただければと思います。

遊びや生活の中で「人権力」を育てる

1. 乳幼児期は「活動を通して発達に必要な経験を積み上げていく」時期

では、こうした「人権力」を育てるためには、おとなは何を意識し、どのように子どもと関わっていけばよいのでしょうか?

ここで大切なのは、乳幼児は「活動を通して発達に必要な経験を積み上げていく」時期であり、そうした発達の特性に応じているが故に、乳幼児期の保育・教育は遊びや生活といった具体的な「活動」を中心に展開されているということです。活動を通じて子どもたちはさまざまな力を育んでおり、「人権力」も、遊びや生活の中で育てられていくものなのです。

2. その活動を通じてどのような人権力を育てるのかを考えてみましょう

では、活動を通じて子どもたちが人権力を育んでいくために、おとなはどのようなことを意識していく必要があるのでしょうか。

まず、「この活動でどのような人権力を育てるのか」を意識することが重要になります。

具体的に考えてみましょう。ある保育所の2歳児クラスで取り組まれていた「ざりがにちゃんごっこ」(子どもたちが、保育者が扮する「ざりがにちゃん」に捕まらないように逃げ、安全地帯の「おうち」に入れば大丈夫、という追いかけ遊び)では、先に「おうち」に逃げ込んだ子どもたちが、まだ逃げている子どもに「〇〇ちゃん!こっち、こっち!」と呼びかけることを通じて、「友だちのことを気にしていき、声をかける」関係を育てることを意識していました。別の保育所で取り組まれていた幼児の「電車しっぽとり」(4人組の子どもたちが電車のようにタテにつながり、一番後ろの子どもがつけているしっぽを取られないように守りながら、他の4人組のしっぽを取りにいくという鬼ごっ

こ)では、誰が先頭になり、誰が2番目になり…といった「順番」でもめることを通じて、子どもたちが「みんなが納得できる公平な決め方」ができるようになることをめざしていました。このように、「この活動でどのような人権力を育てようとするのか」をおとなが明確に意識し、活動を展開していくことが大切です。

3. 「遊び込む」ことが大切

しかし、このことと同時に、活動の中でのさまざまな力は「その活動に子どもたちが没入し、十分に遊び込むことを通じて、活動の喜びを十分に感じる事ができた」結果として育まれるものであるということ意識することも重要です。子ども自身が活動に取り組む時には、活動の中でさまざまな力を育てること自体を直接の目的とはしていません。例えば、「ぼく、思いやりの気持ちにあふれた素敵な人間になることを目指しているから、友だちを助ける『こおり鬼(オニにタッチされたら、コ(逃げる人)は固まってしまい、そこから動けなくなる。コの仲間が助けにきてタッチしてくれたら再び逃げるができるようになるという鬼ごっこ)』をして、『他者を思いやる心』を豊かに育もうと思うねん。だれか一緒にせーへんか?」と考えて遊ぼうとする子どもはおそらくいないでしょう。活動そのものの目的(例えば、こおり鬼でオニに勝つということ)を追求し、捕まらないように逃げるスリルを楽しんだり、友だちを助けるおもしろさを感じたり、作戦を考えて実行するおもしろさを味わう中で、結果として、体が鍛えられたり、友だちを意識し思いやる気持ちが育ったり、友だちと一緒に意見を出し合う力が育つのです。そうした意味で、「豊かな人権力」を育てるためには、十分に活動を楽しみ、遊びのおもしろさを深めることが基本になります。

このように考えていくと、遊びや生活といった活動を通して人権力を育てるためには、取り上げる活動が「どのような人権力を育てるのか」ということと、「子どもにとってどのようなおもしろさ・楽しさ・喜びがある活動であるのか」を分析することの双方が重要になります。

本書で取り上げられたプログラムを実践するに際しても、この2つの視点から活動を分析し、取り組みを方向付けることを意識していただければと思います。

4. 「この子がいま感じている面白さ」が出発点

ただし、ここで意識する必要があるのは、その遊びを行ったからといって、自動的にすべての子どもがその遊びに特有のおもしろさを感じるわけではないということです。子どもが遊びの中で感じているおもしろさは発達していくものであり、また、一人ひとりの子どもが感じているおもしろさも多様です。おとなは、遊びから抜けてしまう子や遊びの中で逸脱行動を取りがちな子に対して、わがまま、協調性がないなどと感じてしまうことがあります。実際には、取り組んでいる遊びが、その子の遊びのおもしろさの発達に合致していない、別のおもしろさを感じている、といった理由からそうした行動につながっている例も多いのです。「その子が今、感じているおもしろさをつかみ、そこを出発点にしながら遊びのおもしろさを深めていく」という姿勢をおとなが持っていることが大切になります。

おとなのエンパワメントも大切

これまで、子どもの人権を「守り」「育てる」という観点から考えてきましたが、もう1つ、大切な課題があります。それは、「おとな自身も生き生きすることが大切」の項でも少し触れたことですが、子どもとともに生きている「おとな」自身が生き生きとすること、自分自身を肯定できるようになること(エンパワメント)です。

子育ては、「こうあるべき」というプレッシャーがさまざまな形でかかってくる営みです。社会の中のさまざまな場において、「母親はこうあるべし」「父親はこうあるべし」という価値観がプレッシャーとなって子育て中の親に対して加えられています。こうした「こうあるべき」という価値観やそれに伴う子育ての「知恵」は、本来は、子育てがより良いものになるために発せられているはずなの

ですが、おとな自身がそうした価値観にしばられてしまうことによって、自分を追い詰め、子育てが「しんどい」営みになってしまい、子育てのありようがより良いものとは反対の方向に向かってしまうこともあります。これでは本末転倒です。

先人の子育てに関するさまざまな「知恵」に学ぶことは大切ですし、そうした知恵を生かすことで豊かな子育てにつながることも事実です。しかし、最終的にどのような「子育ての知恵」を用いるかは、それぞれが置かれた状況によって異なるものです。子どもと自分が置かれた状況の中で最善だと思われる知恵を「自ら選び取る」ことが大切なのではないのでしょうか？

また、「親である自分」を生きると同時に、「1人の個人としての自分」を生きることも、子どもとおとながよい関係を築き、ともに生き生きできることにつながっていきます。極端な場合、おとな自身の自己実現の欲求が子どもに向けられ、子どもを通しておとなが自己実現しようとしてしまい、結果的に子ども自身が「自分の人生を自分で決めていくことができない」ことにつながってしまう場合もあります。おとな自身が「親である自分」の人生と「1人の個人としての自分」の人生をバランス良く生きることによって、両方の「自分」が充実してきます。

ただし、おとなが生き生きとした状況になることを、「個人の心がけの問題」とだけ考え、「自己責任」の問題に押し込めてしまうことは危険です。人間は、周囲の環境や社会との関係の中で、そのあり方を左右される存在です。子どもを取り巻くおとな同士が、つながり、認め合い、協力し合えるような関係性を作ること、社会全体が、子どもとともにいるおとなを支えるシステムを作ることが必要になります。

本書に掲載されたワークを通して、おとなである私たち自身の「子どもに対する見方」をとらえ直し、豊かにしていく機会、「おとなが置かれた状況」を見直し、より良い状態に改善するためにすべきことを考える機会を持っていただければと願っています。

おわりに：「人権尊重の文化」が息づいた・家庭・クラス・子育てネットワークを

私たちはさまざまな人とのつながりの中で暮らしています。こうした家庭やコミュニティのありようは、そこに属している人たちの間に流れ、共有されている「価値観」によって方向づけられています。どのようなことが大切にされ、どのようなことが認められるのか、どのようなことが否定され、何をやったらおとなの注意を受けるのかということは、その家庭やコミュニティが持っている「価値観」だと言えます。当然、さまざまな価値観がせめぎ合っているのですが、子どもたちは、そうした価値観の影響を受けながら、自分自身の価値観を形成していきます。

乳幼児期の子どもの「人権」について考えた時、子どもが属している家庭・地域社会・保育所や幼稚園のクラス・子育てコミュニティに流れている価値観のありようは重要です。子どもの人権を守り、育もうとする価値観が共有され、それを追求している家庭やコミュニティの中では、子どもたちの人権は守られ、豊かな「人権力」を育むことが可能になります。反対に、人権尊重と相反する価値観が流れている家庭やコミュニティでは、子どもたちの人権は守られず、子どもたちが豊かな人権力を育むことも難しくなります。

子どもとおとなが、自分も他者も大切にできる価値観を持ったコミュニティをともに作り上げること、この中でこそ、子どもの人権は「守られ」「育まれる」ということを意識していく必要があります。本書のさまざまな学習プログラムを通じて、「人権尊重の文化」が息づいた家庭・地域社会・保育所や幼稚園のクラス・子育てコミュニティが形成されることを願っています。

参考・引用文献

- ・『子どもの人権力を育てる―尊敬を軸にした人権保育』玉置哲淳 解放出版社 2009
- ・『人権保育とはなにか?―その考え方と具体化への提言』玉置哲淳 解放出版社 1991
- ・『子どもの人権と保育・教育』鈴木祥蔵 監修, 岩堂美智子・吉田洋子 編 保育出版社 2005
- ・『ななめから見ない保育―アメリカの人権カリキュラム』L.ダーマン スパークス 解放出版社 1989 / 1994
- ・『子どもの人権双書7 乳幼児期の子どもたち』子どもの人権双書編集委員会 企画, 坪井節子 編 明石書店 2003

活動・学習プログラム

乳幼児向けプログラム
おおむね0歳～1歳半

乳幼児向けプログラム
おおむね1歳半～3歳

乳幼児向けプログラム
おおむね4歳～6歳

乳幼児と保護者向けプログラム

保護者向けプログラム

乳幼児向けプログラム

おおむね0歳～1歳半

- ① 一本橋（いっぽんばし）
- ② ことりことり
- ③ ばあ！あそび
- ④ 絵本『いないいないばあ』
- ⑤ まねっこあそび

それぞれのプログラムは年齢で区分していますが、0歳～1歳半と表示している遊びであっても場合によっては、おとなと1対1で、または友だちと一緒になど、4歳～6歳まで楽しめます。

ちょっとした時間を利用して年齢にこだわらず遊んでみてください。

-
- ・乳幼児対象のため、プログラムに入る前のタイミングや誘いかけが大事になります。それを「こんな場面で」「遊び・活動への誘いかけ」で示しています。
 - ・※では応用したやり方を提案しています。
 - ・「👉ポイント」では、そのプログラムをする時に大事にしてほしいことを、子どもの目線に立って書いています。

▶ 受け止められる中で育つもの

「ぼくってすごいでしょ！みてみて！」

ある公園のできごと。1歳になったばかりのAくんは、公園にある小さなスロープをハイハイで登っています。いっしょにいた保護者が、「Aくん、がんばって！」「もう少し！」と声援を送っています。ついにAくんは、スロープの頂上に到着しました。その瞬間、Aくんは、自信満々の笑顔で鼻をふくらませ、保護者の方を「キッ！」と振り返りました。「すごい、Aくん！」「登れたねー！」との歓声を受けると、Aくんは「ふんっ！」とうなずき、スロープを降りると、再度、登り始めました。「ぼくってすごいでしょ！みてみて！」と自信にあふれた姿が輝いていました。

「自分は愛されている」という感覚

発達心理学者のE.H.エリクソンは、乳児期（誕生から15ヶ月－18ヶ月ごろ）の発達課題として「基本的信頼の獲得」を挙げています。「基本的信頼の獲得」とは、周囲の人や世の中に対する「信頼」の感覚を獲得すること、「この世に生まれてきて良かった」という感覚を獲得することと言われますが、この感覚を身に付けることが、その後の人生において、人を信頼し、自分は自分で大丈夫という気持ちを持つための土台となっていきます。こうした感覚は、「お腹がすいて泣いたら、養育者が空腹を満たしてくれた」など、子ども自身の要求が満たされることによって育っていきます。そして、自分が発した要求が満たされる中で子どもは、「自分は受け止められる価値のある存在だ」「愛されている存在だ」という感覚を身に付けていきます。

この時期の子どもが基本的信頼を獲得するためには、おとなは子どもが発する要求にできる限り応えていくこと、子どもの思いを受容することが大切になります。常に子どもの思いを受け止められるわけではありませんし、子どもの要求が何であるのか分からないこともあって当然なので、ゆるやかに考えておくことも大切になりますが、「基本的には自分の要求は受け止められる」という経験を重ねる中で、子どもは世の中に対する信頼感を獲得し、自分は価値のある存在だと認識できるようになります。

子どもとおとなの「応答関係」から

ここに挙げられた「おおむね0歳～1歳半」の子どもを対象としたプログラムは、子どもがおとなに「してもらおう」ことをきっかけにした活動が中心になっています。こうした活動の中で、「楽しい」「心地良い」「安心」といった「快の感情」を十分味わうことが、「この世に生まれてきて良かった」「この世は安心できる場所だ」という感覚を育んでいきますし、「もう1回やって！」と要求し、おとながそれに応えてくれる経験をする中で、「自分の要求は受け止められている」「自分は愛されている」という気持ちを持つことにつながります。また、「いないいないばあ」などの遊びで、子どもの行為におとなが楽しんで反応していくことが、「自分は価値のある存在だ」という感覚を身に付けるきっかけとなります。こうした応答関係が、乳児期には重要なのです。

冒頭のエピソードに見られたAくんの姿は、Aくんを受け止める保護者の姿勢があってこそ実現した姿なのです。

一本橋 (いっぽんばし)

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分が好き・人が好き

公平：順番があるということやどの子とも分けへだてなく関わるなど

ね ら い

心身ともにリラックスし安心して人にゆだねる等、人への愛着・信頼を育み、楽しい遊びを通して、自分の気持ちを表現する力や意欲、おとなへ働きかける力を育む。



対象

おおむね0歳～1歳半

(おとなと子どもの2人組で、年齢によっては子ども同士で)



所要時間

3分程度



準備するもの

なし

やってみよう

こんな場面で

- ・子どもが泣いている、子どもの気分を変えたい時。
- ・子どもが所在なげにしている時。
- ・健診等、待ち時間を利用して。

遊び・活動への誘いかけ

- * 子どもと向かい合って座ったり、ひざの上に抱っこしたりします。
- * 「さあ！今からこの一本橋が〇〇ちゃんのところに遊びにいきますよー」
(おとなが、人さし指をぐるぐるまわしたり、おなかなどツンツンふれたりする。)
- * 「さあ！どこに遊びに行こうかなあ」人さし指でぐるぐる。
「あっ！ここが(手のひらに触れて)来て来て！っていつてるよ。ここからいこうかなあ」と手のひらへ。

進め方

- ① ♪一本橋♪
歌いながら人さし指1本で子どもの手のひらを2回トントンする。
- ② ♪コチョコチョコ♪
手のひらをくすぐる。
- ③ ♪たたいて♪
手のひらをやさしく2回たたく。
- ④ ♪つねって♪
手のひらをやさしくつねるまねをする。
- ⑤ ♪階段上ってコチョコチョコ♪
手から腕をのぼって脇をくすぐる。
- ⑥ 「次は、2本橋（3本橋）が遊びにゆくからねー、待っててねー」
（2～3本橋も、①～⑤を繰り返す。）



※手のひらだけでなく、「頭から」「おへそから」「足の裏から」スタートしても遊べます。

※4本橋、5本橋と指の数を増やしてもOK！

※繰り返して慣れてきたら、子どもにしてもらうのも楽しいです。

（おとなの笑顔をいっぱい見せられてこどもの安心感が広がります。）

※保育所や子育て広場など他の子どもがいる場合には、「○○ちゃんの次ね」「待っててね」など声をかけることで順番などを学ぶことにもつながります。

ポイント

★初めてのときは、喜びの表情を見せないこともあります。が、「これは何？」と一生懸命考えています。繰り返すことで「コチョコチョコされる！」期待感が高まり、ワクワクドキドキ！最高の笑顔が見られます。この遊びを通して「もっとしてほしい！」という意欲とおとなに働きかける力が育ちます。どの遊びも、子どもがしぐさや表情で「もっとして！」と求めるなら、できる範囲で応えてあげたいですね。

ことりことり

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分が好き・人が好き

公平：順番があるということやどの子とも分けへだてなく関わるなど

ね ら い

信頼できるおとなに抱っこされる安心感や一体感を味わう中で、自己肯定感や人への信頼を育む。



対象

おおむね0歳～1歳半
(おとなと子どもの2人組で)



所要時間

5分程度



準備するもの

ふとんまたはスポンジマット、場合によってはバスタオルや大きめの布（1枚）

やってみよう

こんな場面で

- ・子どもが泣いている、子どもの気分を変えたい時。
- ・健診など、待ち時間を利用して。

遊び・活動への誘いかけ

- * 「〇〇ちゃん、どうしたのかな？」「〇〇ちゃん、抱っこしようか」
「〇〇ちゃん、今からことりちゃんになりますよー」と話しかけます。
- * 子どもと向き合って「ゆらゆらしてみようか」
と声をかけてから、横抱きして、ゆっくり揺らしはじめます。

進め方

① ♪こーとりことり♪

歌いながら子どもを左右に心地よくゆっくり揺らしましょう。

② ♪向こうのお山へ飛んでいけー♪

「飛んでいけー」のところで横抱きにしたまま少し頭を高く上げて飛ばすしぐさをすると喜びます。



※1歳児などの大きい子どもは「飛んでいけー」のところで用意したスポンジマットやふとんの上に置いてあげると喜びます。

※歌は、「かごめかごめ」「なべなべ」などと同様、わらべ歌風に自由に歌いましょう。

※保育所や子育て広場など他の子どもがいる場合には、「○○ちゃんの次ね」「待っててね」など声をかけることで順番などを学ぶことにもつながります。

ポイント

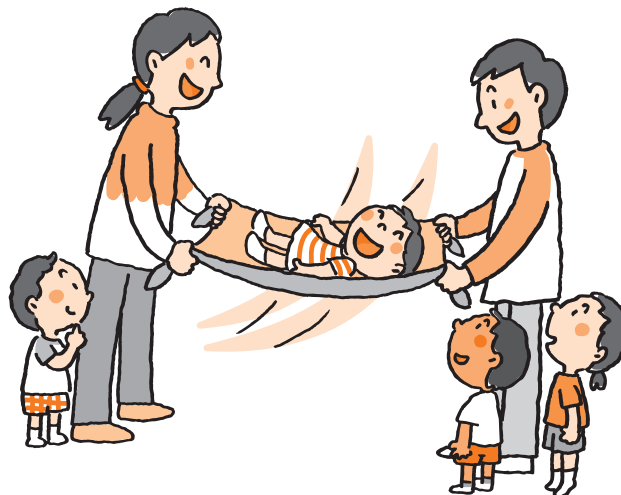
★大きく揺らすのは、子どもにとってこわい思いをすることもあるので、静かにゆっくりと揺らしましょう。子どもがきげんよく過ごせない時は、何らかのサインを発信しています。体調に異変は見られず「甘えたいよー」のサイン（お腹もすいていない、おむつもぬれていない、でもぐずったり泣いたりする）の時には、この遊びでゆったり過ごしてみましょう。

子どもを抱いてゆらゆらすると、じーっと顔を見ておとなに身体をゆだねてきます。しっかり視線を合わせてほほえみを返したり、ほほとほほを合わせて抱きしめたりすることで、より安心感や人への信頼が育まれます。

事前に「～するからね」と声をかけてからスタートすることで期待感につつまれ、この年齢なりの先を見通す力にもつながります。

★保育所や子育て広場など、子どもが集まる場では、大きな布（バスタオルなど）に子どもを乗せて2人のおとなで揺らす方法や「飛んでいけー」で人から人へゆだね、しっかりと受けとめてもらう方法なども楽しめます。

子どもの満面の笑みを誘う遊びです。



ばあ！あそび

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分が好き・人が好き

公平：順番があるということやどの子とも分けへだてなく関わるなど

ね ら い

「ばあ！」で人とやりとりする楽しさを感じ、楽しい遊びを通して、子どもから大好きなおとなを誘う力や遊びへの意欲を育む。



対象

おおむね0歳～1歳半
(おとなと子どもの2人組で)



所要時間

3分程度



準備するもの

顔がかくれる程度の大きさの布、タオルなど

やってみよう

こんな場面で

- ・子どもがタオルなどを持って偶然、顔をおおうしぐさをしている時。
- ・物陰にちょこんと座っている場面などを見つけた時。

遊び・活動への誘いかけ

- * 「〇〇ちゃん、どこにいるかなあ」
- * 「〇〇ちゃんがないなあ、どこかなあ」
- * 「あ～！〇〇ちゃんみつけた！」
- * 「〇〇ちゃん、いないいないばあ！しょうか！」
と声をかけます。

進め方

- ①おとなが手やタオルなどで顔を隠し、「いないいない…ばあ！」で顔を出してみせる。
（「ばあ！」は、とびっきりの笑顔で）
- ②「〇〇ちゃんもしてみよか？」と声をかけ、子どもがおとなのまねをして「ばあ！」をする。
- ③何回も繰り返す。



※ハンカチで、本で、ドアやカーテンに顔を隠して、物陰に隠れてなどさまざまな「ばあ！」を楽しみましょう。

※子どもが隠れるしぐさをした時や自分でタオルなど布を持って顔に当てた時など、おとなも同じようにまねしてみせて、「ばあ！」と声をかけてみましょう。

※保育所や子育て広場など他の子どもがいる場合には、「〇〇ちゃんの次ね」「待っててね」など声をかけることで順番などを学ぶことにもつながります。

ポイント

- ★人の顔が「ばあ！」と現れる意外性を楽しみ、繰り返すことで自分もまねして「ばあ！」とした時のおとなの反応を喜び、何度もしようとしています。このことは、おとなが喜んでくれる（認めてくれる）という達成感、自信へとつながり、子ども自身の自己肯定感（自分への自信）を高めるとともに、人と関わる嬉しさの基本となります（他者への尊敬）。
- ★保育所や子育て広場など、子どもが集まる場では大きな布にみんなで隠れたり、「ばあ！」と一緒に顔を出したりする遊びや、子ども同士、子どもとおとななど、2人でかくれるのも楽しいです。
絵本『いないいないばあ』（P20）につなげて、動物の「ばあ！」も一緒に楽しめるといいですね。

絵本 「いないいないばあ」

尊敬

キーワード 尊敬：自分が好き・人が好き

ね ら い

身近な人にゆったりと絵本を読んでもらうことを通して、他者への関心を育む。



対象

おおむね0歳～1歳半
(おとなと子どもの2人組で)



所要時間

3分程度



準備するもの

絵本『いないいないばあ』（松谷みよこ著）童心社 など

やってみよう

遊び・活動への誘いかけ

- ・絵本に関心を示してさわったり、ページをめくろうとしたり、じっと絵を見ているなどの姿が見られたら「一緒に見ようね」と声をかけてみます。

進め方

- ①子どもをおとなのひざにのせてゆったりと読む。
- ②次々にあらわれる動物の名前を「ねこちゃんだね」「くまさんだ！」などと伝えながら、「ばあー！」の部分は思いきりオーバーアクションでする。
- ③子どもが出てくるところは「あっ！○○ちゃんかな？」と子どもの名前に置き換えて読んでも喜ぶでしょう。



ポイント

- ★実際に身近なおとなと「ばあー！」のやり取りをいっぱいしてから絵本を読んだほうが、子どもはより喜ぶでしょう。「いないいない」で振りをため込んで、「ばあー！」では思いきり元気よくオーバーアクション！おとなも「楽しい！おもしろい！」表情を子どもに示してみてください。
- ★絵本は日頃から子どもの手の届くところにあるといいですね。家がない場合、どこの図書館でも、赤ちゃん向け絵本のコーナーを探すとみつかると良いでしょう。

まねっこあそび

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分が好き・人が好き

公平：順番があるということやどの子とも分けへだてなく関わるなど

ね ら い

まねっこをする・されるおもしろさ、楽しさを感じ、「もっと」とおとなを誘う力や遊びへの意欲につなげる。



対象

おおむね0歳～1歳半

(おとなと子どもの2人組で、年齢によっては子ども同士で)



所要時間

3分程度



準備するもの

なし

やってみよう

こんな場面で

- ・子どもがいろんな動き、表情をしている時。



ばあー、口をレ口レ口、手をぱちぱち、ほっぺぽんぽん、おなかぽんぽん、口に手をあててプー、お顔くしゃくしゃ、机や床をトントンなど

進め方

- ①おとなが子どものした動作をまねてみせる。
- ②次は、おとながしてみせるまねっこ。
ぱちぱち・ちょちちょちあわわ・オツムテンテンなど手遊び・動作をする。
- ③保育所や子育て広場など子どもが集まる場では、1人の子どもの動きをみんなでまねてみましょう。



ポイント

- ★まねっこは、好きな人、信頼を寄せている人のまねをすることから始まり、手を洗う、かんたんな片付けを手伝うなど、生活とも結び付いて身につくきっかけとなるものです。まねっこをする・されるは、やがておとなから友だちへと広がっていき、お互いに顔を見合わせて笑いあう光景が見られるようになります。「まねっこされない子」は？ もし、そんな子がいたら、まわりにうんとアピールしてあげてください。
- ★保育所や子育て広場など、子どもが集まる場では、おとなと子どものまねっこをまわりで一緒にみたり、「〇〇ちゃんのまねしてみようか？」と誘い、みんなで〇〇ちゃんのまねっこをしてみるのもおもしろいです。

乳幼児向けプログラム

おおむね 1 歳半～3 歳

- ① まてまて遊び
- ② ごっこ遊び
- ③ あぶくたったにえたった
- ④ コーナー遊び

- ・乳幼児対象のため、プログラムに入る前のタイミングや誘いかけが大事になります。それを「こんな場面で」「遊び・活動への誘いかけ」で示しています。
- ・※では応用したやり方を提案しています。
- ・「👉ポイント」では、そのプログラムをする時に大事にしてほしいことを、子どもの目線に立って書いています。

▶ 「出会い・共に楽しみ・表現し・ぶつかり合う」中で育つもの

まねっこ大好き！

ある保育所での2歳児クラスのおやつの時間のエピソードです。先生がスプーンを配ると、ある子がスプーンでテーブルを「コン・コン・コン・コン」とたたき始めました。すると、同じテーブルについていた他の子どもたちも、まねっこをして「コン・コン・コン・コン!!」。気がつくと、クラス中の子どもたちがそろって、「コン・コン・コン・コン!!」の大合奏。おやつとお茶が配り終えられ、「いただきます」のごあいさつをした後で、ある子が隣の子とコップをもって「カンパニー!!」。すると、周りの子どもたちも「カンパニー!!!」。気がつくと、保育室中で「カンパニー!カンパニー!」と、さながら、パーティ会場のような光景が繰り広げられました。

こうした姿は、保育現場ではよく見られるエピソードです。幼児期前半の子どもたちは、友だちへの関心が急速に高まり、友だちのまねっこをすることも非常に多くなってきます。友だちと出会い、ともに楽しむことを大切にしたい時期です。

ぶつかり合いの中で「他者」に気づき、出会う

友だちと出会い、ともに楽しむことは、「人っていいな」という気持ちを感じることに繋がります。しかし同時に、人と一緒に活動することは、ぶつかり合いも生み出します。同じものを使いたい、自分が先にやりたいなど、子ども同士の思いがぶつかり合うことは、当然のこととして起こってきます。そして、このぶつかり合いが、子どもたちの育ちにとって大切なのです。

子どもは、自分自身の視点を中心として周囲の世界を見ている、と言われています。これは「自己中心性」と言われますが、おとなの「自己中心的」とは異なるものであり、子どもの思考の発達的特質として捉える必要があります。そして、子どもは、さまざまな人と出会い、ぶつかり合う中で、自分とは異なる他者と出会い、次第に自己中心性を脱していきます。その中で、相手の立場に立って物事を考えることが可能になっていくのです。そうした意味で、他の人とのぶつかり合いは、子どもの発達にとって重要な経験なのです。

「思いを表現する」ことが基本

こうしたぶつかり合いは、一人ひとりの子どもが「自分の思い」を出すことによって可能になります。そのためにおとなは、子どもが「思いを出す」ことを支える役割を果たしていく必要があります。また、子ども同士の思いがぶつかり合ったときに、お互いの思いをしっかりと受け止めつつ、相手の思いも少しずつ伝えていく「通訳」としての役割を果たしていくことも必要になってきます。少なくとも、トラブルを事前に止めてしまうことや、おとなの事情によって思いを出すことを叱責することは避けていけると良いですね。そのために、おとな同士（特に親同士）が、「子どもにとってぶつかり合うことは大切な経験だ」ということを共有し、ぶつかり合いを当然のこととして受け止めていける関係を作っていくことが大切だと思います。

「人は違って当たり前」と感じられる環境を

また、こうしたさまざまな出会いの中で子どもたちは、自分とは違う他の人の特徴（例えば、肌の色が違う、外見から分かる障がいがある、など）に少しずつ気づき始めます。その時、子どもたちが「人は違って当たり前」とであると気づけるようにしていくことが大切になります。そのためには、まずはおとな自身の反応が、「人は違って当たり前」という考え方に基づいたものになっているかどうかを確かめていきましょう。また、さまざまな違いが当たり前のこととして子どもの周りの環境に表わされているかどうか（例えば、保育所であれば、保育室の壁面構成、絵本、人形といったものが人々の多様性を表わしたものになっているかどうか）を振り返ってみましょう。「人は違って当たり前」と感じられる環境の中でこそ、子どもたちの多様性を認める感性が育っていくのです。

まてまて遊び

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）
公平：対等な関係

ね ら い

子ども同士またはおとなとの「追う・追われる」活動を通して、共感や協力する力を育む。



対象

おおむね1歳半～3歳
(おとなと子どもの2人組で、または
子ども5～6人から10人くらいで)



所要時間

15分～20分



準備するもの

なし

やってみよう

遊び・活動への誘いかけ

- ・おとなに遊んでほしいなあという姿を見せけている時（ちらちら見ている）。
- ・走ること自体を楽しんでいる子がいる時。

進め方

(パターン1)

- ①「まてまてー」と嬉しそうに追いかけてみましょう。
- ②「〇〇ちゃんがいたあ!」「まてまてー」と追いかける。
- ③「〇〇ちゃん、まてまて」と名前を呼びながら追いかけたり、逃げたりを無条件に楽しむ。
- ④何回かはつかまえない「まてまて」を楽しむ。



※見ている子は、逃げるのが苦手だったり走るのがいやだったりするので、おとなと手をつないで、「〇〇ちゃんを一緒に追いかけてみよう」と誘ってみましょう。
それでもいやだったら、無理強いしないで、「どんなことしているか見ててね、おもしろそうかな？」と声をかけてみましょう。

※その子の好きな遊び方（参加のしかた）を見つけましょう。

（パターン2）

- ①「次は、つかまってもいやじゃない追いかけてこだよ！」
「つかまったら、みんなが大好きなことをしてもらおう追いかけてこにしよう、どんなことしてほしい？」と問いかける。
（ハグ〈すきすき〉、こちょこちょ、頭なでなで、まねっこetc…）。
- ②「じゃあ、つかまったらハグしてもらうことにしよう」
- ③つかまって好きなことをしてもらった後は、追う側になる（鬼が増えていくので、鬼はぼうしをかぶるなど工夫しましょう）。



※つかまえた子に、「してほしいこと」を聞くのもいいでしょう。

※バリエーション豊かに、「赤い服を着ている〇〇ちゃんを追いかけてよう」「白いズボンの△△ちゃん」「髪を結んでいる□□ちゃん」など友だちの名前を伝えながら一人ひとりを意識させていきましょう。

※「つかまっていないのは誰かなあ？」と、つかまっていない子の存在にも気づかせていくと、関係が広がるきっかけとなります。

※繰り返し楽しんだら、「おうちに入ればつかまらない」「つかまりそうになっても、だれかと手をつないだらつかまらない」など簡単なルールで遊びを変化させていくのもOK！。



ポイント

★「したくない」子が変！ということではなく、おとなも趣味がそれぞれ違うように、子どもも好きな遊びは一人ひとり違います。「ここはおもしろそう」という場面が見つかり、納得しないと参加しない子もいるので、その子の好きなキャラクターを取り入れる（キャラクターのお面をつけて追う）など、ひと工夫してみるといいかもしれません。

★追う・追われる「まてまて遊び」でいつも同じ子がつかまってしまう傾向が見られた場合に、「つかまったらどうしよう！」と、ときどきしすぎて楽しめない子もいるので「絶対につかまえない」ルールもあがあると純粋に楽しめます。

また、追われて逃げるのは楽しいけど、「つかまるのはいやだ！」という子がいる場合は、「つかまってもこわくない、楽しいことが待っている」という安心感を持つことをねらいにおくのもいいでしょう。

ごっこ遊び

尊敬・公平
反偏見

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）

公平：対等な関係

反偏見：さまざまな違いを当たり前前に受けとめる

ね ら い

- ・好きな遊びで、自分なりの遊び方をみつける力を育む。
- ・ごっこ遊びを通して「○○ちゃん、一緒にしよう」と友だちと誘い合う力を育む。
- ・ごっこ遊びを通して友だちとのやりとりを楽しむ力、イメージをふくらませる力を育む。
- ・やりたい役割が同じなど、相手の気持ちに気づく力を育む。



対象

おおむね1歳半～3歳

（1つのグループで2～3人から5～6人までおとなと一緒に）



所要時間

20分程度



準備するもの

（おうちごっこの場合）

人形、ほにゅうびん、いらなくなったなべ、ポット、ガス台に見立てたもの、ままごとの包丁、まな板、お玉、茶わん、皿、コップ、スプーン、テーブル、イス、洗濯機に見立てたダンボール箱、かばん、電話、衣類、物干し、人形、スーパーの袋、バンダナ、エプロンetc

※すべてを準備する必要はありません。この中で家庭にあるもの、そろえやすいもの2つ3つからでも子どもは遊び始めます。

（お店屋さんごっこの場合）

子どもがイメージしているお店にありそうなものを用意してみましよう。

新聞のチラシにのっている写真を切り抜いたものや古いカタログを切り取ったもの、子どもと一緒に作った紙粘土のお菓子やケーキ、カラフルな布の端切れなどを並べたお店も楽しいですよ。



こんな場面で

- ・子どもがままごとをしたり、人形を出して何かに見立てて遊んでいる時。

遊び・活動への誘いかけ

- * 「〇〇ちゃん、お鍋持って何しているの？」と子どもが遊んでいるようすを見守りながら「今から何つくるの?」「おいしそうだね」「おいしいごちそうできたら呼んでね」など声をかけます。

進め方

- ①子どもがなりたい役になって遊ぶ（お母さん・赤ちゃん・犬など）。

* 子どもの声・反応

- ・ごはんを作っておとなに「あーん」「はいどうぞ」と食べさせる。
- ・「おいしい?」と聞く。
- ・「今まぜまぜしてるから、待っててね」「赤ちゃんのごはん作る」
- ・コップを持って「かんぱーい」など。



- ②友だちとのやりとりが楽しめるよう、フォローしましょう。

* 例えば、子どもの様子を見て、こんな言葉をかけてみましょう。
「今日のごはんは何ですか」



「いいにおい！みんなもおいを嗅いでみて！」
（カレーが目の前にあるつもりになって）
「カレーに入っている物なーんだ！」
「〇〇ちゃんのおうちには赤ちゃんがいるよ」
「お友だちとかなぱーい」など



- ※中には、遊ばずに見ている子、ひたすらごはんを混ぜている子もありますが、子どもも十人十色、いろんな姿があっていいですよ。
- ※見ることも参加の1つなので「ごはんつくってるね」など声をかけ、見守りましょう。
- ※まぜたり、こねたり、ごっこの中で楽しいことが見つければ、納得するまで遊ばせるといいでしょう。頃合いを見て、「〇〇ちゃんとかなぱいしようか」など、つなげていきます。
- ※自分のイメージや体験から遊びを展開させていきます。その時に、応じてくれるおとなや友だちの存在がごっこ遊びを豊かにしてくれます。「おいしいね」「まぜまぜ上手だね」などの声かけをすると遊びが広がります。
「いただきます！」などおとなも一緒に楽しみましょう。
- ※子ども一人ひとりがイメージを持ちやすいごっこ遊びを選びましょう。
- ※ごっこの内容に応じて、準備するものをそろえます。

ポイント

★子ども発のごっこ遊びを大事にしましょう。

この頃になると、生活を再現しておとなのごちそうづくりをまねたり、自分が身近な人になったつもりで遊ぶようになります。まだまだ役割を決めて遊ぶところまではいかず、保育所などでは、みんながお母さん（お父さん）になってのごっこが展開されることがありますが、暖かく見守りましょう。「何もしない」「見てるだけ」という子どもの姿もありますが、「見て学んでいるんだな」ととらえ、ごっこの中でその子がしたいと思っていることを見つけて声をかけていきましょう。

「おうちごっこ」「買い物ごっこ」「お店屋さんごっこ」「電車ごっこ」「魚つりごっこ」など、身近で子どもがイメージしやすいものから取り組むと良いでしょう。まずは、ごっこに使えるようなものを準備して、子どもがどうするか見守りましょう。

子どもたちがとまどっているようなら、声をかけて、子ども同士をつないでいきましょう。

「○○ちゃんもしたい!」「かわって」「いれて」「あとで」など、おとなにフォローしてもらうことで友だちへの声のかけ方など、やりとりする楽しさも身につけていきます。

★さまざまなごっこ遊びを通して「男がエプロンしてるって変!」「女なのに青い服着ている」など女らしさ・男らしさについての意識が顕著に表れることがあります。こんな場面に出会ったら「そんなことないよ」「○○ちゃんはエプロン好きなんだよね」「青色ってきれいだよね」などと声をかけ、男女問わず「自分がどうしたいか」を決めていいということ、自分らしく生きることの大切さを知らせて、刷り込まれている女らしさ・男らしさに関わる価値観を揺さぶっていききたいですね。

★保育所や幼稚園、子育て広場など子どもが集まる場では、多文化の視点からも遊びを展開できることがあります。例えば、肌の色が違う人形など、楽しい遊びを通して触れることで、そこから子どもたちの持つ価値観（肌ははだいろ※に決まってる!髪の毛が縮れているのは変!）を揺さぶり、多様さを受け入れるきっかけとすることもできます。

※世界にはいろいろな人種や民族の人々が暮らしており、日本にもさまざまな肌の色の人が暮らしています。従来のように「はだいろ」という表現を使うことは、肌の色に対する固定観念を植え付けることにつながるおそれがあることから、現在では「うすだいだい」「うすオレンジ」などと表記されています。

あぶくたつたにえたつた

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）
公平：対等な関係

ね ら い

やりとりの楽しさやイメージをふくらませる楽しさを感じ、子ども同士の活動を通じた共感や協力する力を育む



対象

おおむね1歳半～3歳
(10人～15人くらい、おとなも一緒に)



所要時間

15分～20分
程度



準備するもの

なし

やってみよう

こんな場面で

- ・やりとりする遊びを楽しみたい時。
- ・子ども自身に「あー楽しかった！」と遊びの楽しさを感じて欲しい時。

遊び・活動への誘いかけ

- ①「おいでー」と子どもたちを集めます。
- ②「さあ、今からおもしろいことしてみようか？お友だちと手をつないでまあるくなろう」と声をかけ、みんなで輪を作ります（おとなも一緒に）。
- ③「私はお豆さんになってここに（真ん中に）いるから、みんなはそのまわりをまわって歌ってね」

進め方

- ①♪あーぶくたった煮えたった、煮えたかどうか食べてみよ♪
歌に合わせて輪になって手をつなぎ、豆のまわりをぐるぐる回る。
※豆を煮るイメージでスタートする。
- ②ムシャムシャムシャ
豆のところに集まり、むしゃむしゃと食べるまねをする。
- ③豆：「まだ煮えない」と言う。
- ④①～③を3回繰り返す（3回目は豆が「もう煮えた」と言う）。
- ⑤「お家に帰って戸棚に入れて、鍵をかけてがちゃがちゃがちゃ」「ご飯を食べてむしゃむしゃむしゃ」「お風呂に入ってゴシゴシゴシ」「おふとんしいて寝ーましょ」
違う場所（お家）へ移動し、家に入って鍵をかけるまね、ご飯を食べるまね、体を洗うまね、ふとんをしいて寝るまねをする。
※豆だった人が鬼になります。
- ⑥鬼（豆だった人）：「トントントン」
鬼が家にやってきて戸をたたくまねをする。
- ⑦みんな：「何の音？」と鬼に聞く。
- ⑧鬼：「時計の音」（風の音・車の音・電車の音などで繰り返す）。
- ⑨みんな：「あー良かった！」
⑥～⑨を何回か繰り返す。
（最後に）
- ⑩鬼：「トントントン」
- ⑪みんな：「何の音？」と鬼に聞く。
- ⑫鬼：「おばけの音！」といったらみんなは逃げる。
- ⑬鬼に捕まった子が次の鬼になる。

※はじめは、鬼以外にもおとなが入って一緒に歌いながら回りましょう

※歌は、「かごめかごめ」「なべなべ」などのわらべうた風に自由に

ポイント

- ★おとなが豆（鬼）役になり真ん中へいくと、「僕も」「私も」と一緒にしたがる子もあらわれますが、それもOKです。1歳半から2歳頃までは、おとなも一緒に鬼をするといいいでしょう。
鬼は、「おばけの音」になるまで何回でも違う音（風・ラッパ・車etc…）を言ってもいいので、音を考えたり、やりとりを楽しんだりできます。
点線まで逃げればつかまえられないルールや必ず友だちと手をつないで逃げるというルールなど、やり方を変化させれば5～6歳まで楽しめ、「友だちと遊んで楽しかった」という充実感を子ども自らが実感できる遊びです。
- ★家庭でおとなと2人で遊んでもやりとりがおもしろいです。子どもも「お風呂に入った音」「お湯がわいている音」など、さまざまな音を見つけて驚かせてくれます。

コーナー遊び

尊敬

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）

ね ら い

- ・自分の好きな遊びがみつけれ、それで遊ぶことに喜びを感じ、自己肯定感を育む。
- ・友だちの好きな遊びに気づく力を育む。



対象

おおむね1歳半～3歳
(1人で、遊びによっては2～3人で)



所要時間

15分～20分
程度



準備するもの

一人ひとりの好きなもの
(人形・ままごと・台所用品・粘土・紙類・ブロック・積み木・
絵本・ひもとおし、パズルetc)

やってみよう

遊び・活動への誘いかけ

- ①子どもの好きな遊びをいくつか用意してコーナーをつくります。
- ②子どもが自分で取り出せるコーナーにするのがいいでしょう。
- ③集中して遊んでいる時は見守りましょう。

※1つの遊びに何人かが集まった時、おとなは一緒に楽しく遊ぶための声かけをしたり、遊ぶものの数を増やしたりと、一人ひとりが満足するよう工夫してみましょう。
※子どもが自分で片付けやすいように、おもちゃの種類ごとに小さな箱や空き缶に入れておくなど工夫があるといいですね。初めはおとなが片付けのお手本をみせて、一緒にするといいでしょう。

ポイント

★自分の好きな遊びが見つけられて、落ち着いて遊べる環境は子どもにとって大切な居場所となり、子ども自身の気持ちや感情がいやされます。

「明日もこれで遊びたい」と子ども自身が思えるコーナーづくりをします。

週単位、月単位で子どもの興味に合わせて、コーナーの中身の工夫と点検があるといいでしょう。

コーナーの中で育つ子どもの関係を大切に、子どもの遊びや関係によって中身を替えていきましょう。

★家庭でも、子どもが好んで遊ぶものをいくつかそろえて、部屋の一角に小さな布や座布団などを置いていつでも遊べる環境を整えると、ほっとできる子どもの居場所になります。

コーナー遊びを通して、子どもが遊びたいことを自分で決める、遊んだ後は自分で片付けるなどの習慣を身に付けていきます。



乳幼児向けプログラム

おおむね4歳～6歳

- ① しっぽとり
- ② 手遊び「アルプス一万尺」
- ③ ふたりぐみ電車リレー
- ④ なべなべ底抜け
- ⑤ 「〇〇国フェスティバル」
- ⑥ 「みえないってどんなこと？」
～感じよう！知り合おう！～

- ・乳幼児対象のため、プログラムに入る前のタイミングや誘いかけが大事になります。それを「こんな場面で」「遊び・活動への誘いかけ」で示しています。
- ・※では応用したやり方を提案しています。
- ・「👉ポイント」では、そのプログラムをする時に大事にしてほしいことを、子どもの目線に立って書いています。

▶「いろいろな仲間とともに生きる」中で育つもの

さまざまな違いを持った人とともに暮らしていく力

幼児期の後半は、仲間とともにやりとりをしながら遊ぶことが急速に増えてくる時期です。子どもたち同士で思いを出し合いながら遊ぶことも次第にできるようになってきます。また、その中で、さまざまな思いのぶつかり合いが生まれ、さまざまな葛藤も経験します。

子どもたちは一人ひとり、本当にさまざまな個性を持った存在です。自己主張がはっきりしている子もいれば、自己主張が苦手な子もいます。得意なこと、苦手なこともさまざまです。障がいのある子もいれば、さまざまな民族的ルーツを持っている子どもたちもいます。保育所や幼稚園のクラスは、そうしたさまざまな個性を持った人々がともに暮らしている、子どもにとっての「社会」なのです。そして、この社会の中で暮らす中で、子どもたちが「さまざまな違いを持った人とともに暮らしていく力」をつけていくことは、幼児期の発達のととても大切な課題なのです。

不合理に気づき、解決方法を考える力を

しかし、4歳ごろになり、自分と他者を比較できるようになってくる中で、子どもたち同士の力関係が顕在化し、遊びの中でさまざまな矛盾が生じてくることもあります。遊びの中でいつも自分の思いどおりにしている子もいれば、反対に、いつも自分の思いを飲み込んでいる子もいます。友だちに自分の思いや提案を受容されることがとても少ない子もいます。そうした集団の中の課題や矛盾を乗り越え、「みんなが対等に遊べる力」、「不合理に気づき、そんなのずるい！と指摘できる力」、「みんなが納得できる解決方法を考える力」を育てていくことが大切になります。そのためにもおとなは、子どもたちが遊びの中で自分の思いを出すこと、友だちの思いに気づくこと、その中で不合理なことに気づき、解決策を考えようとすることを支えていく必要があります。

問題解決のために子どもとともに考えることがおとなの役割

この時、意識すべきことがあります。それは、子どもたちの関係の中では、力関係やさまざまな矛盾は「起こってくるものだ」と考え、そうしたことが起こらないようにおとなが管理して予防線を張ることよりも、起こってきた力関係や矛盾といった問題を、子どもがおとなの援助を受けながら「克服する」ことによって、子どもたちが問題解決する力をつけていくこと、その中で、自分も仲間も大切にできる気持ちを育てていくことが重要だ、ということです。おとなの役割は、問題を回避させることなく、問題をともに解決することで、子どもたちがさまざまな事態に対応できる力をつけていくことなのです。

違いを正確に知ること

もう1点、さまざまな違いを持った人たちと出会う中で、子どもたちが、違いを「正確に」知ることとはとても大切です。肌の色が違う外国にルーツを持つ子どもに対して「体が汚れている」と避ける日本人の子どもがいる、という報告はしばしば聞かれることですが、こうした人々が持つ違いに対する不正確な理解は、偏見につながっていくのです。

ここでおとなの役割として大切なのは、子どもたちに正確に伝えるということです。人々にあるさまざまな違いに対して子どもたちは、「どうして？」と質問をしてきます。その質問に対して「ごまかす」という反応は、最も良くない反応だと言われます。なぜなら、ごまかすことによって、子どもたちは、そのことが何か触れてはいけない良くないことだ、と認識してしまうからです。障がいや民族の違いなどのさまざまな違いを正確に説明できる言葉と、正確に理解できるような経験の投げかけを行うことは、おとなの大切な役割なのです。

しっぽとり

尊敬・公平
反偏見

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）
公平：対等な関係
反偏見：不合理への気づき（それっておかしい！）

ね ら い

- ・子ども同士の活動を通して、仲間と協力する気持ちや力、共感する力を育む。
- ・しっぽを取れない〇〇ちゃん、いつも取られる□□ちゃん存在など、そのことの不合理に気づき、どうしたらいいか考えたり、行動したりする力を育む。



対象

おおむね4歳～6歳
(20人～30人) (子ども同士で)



所要時間

30分程度



準備するもの

しっぽに見立てるもの（細く切った新聞紙や広告、包装紙など、紙テープ、布など） ※鬼の目印となるものは帽子でもよい

やってみよう

こんな場面で

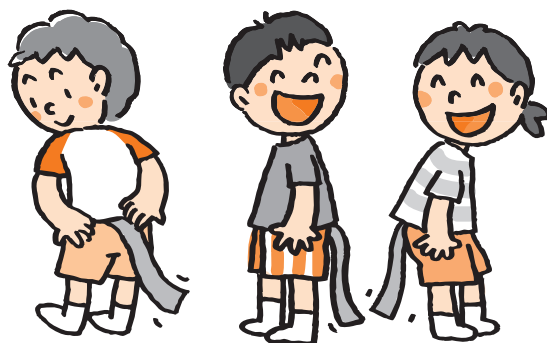
- ・無条件に身体を使っでの遊びを楽しみたい時。
- ・楽しみながら、友だちの存在にも気づく機会にしたい時。

遊びへの誘いかけ

- * 「これは何かなあ」（しっぽを見せる）
- * 「こんなことも、こんなこともできるねえ」（頭・腰・手首・足首などつけてみせる）
- * 「きょうはここにつけて遊ぼう」（ズボンやスカートの後に紙で作ったしっぽをはさんでみる）
- * 「何に見える？」
- * 「しっぽみたいね、じゃあ今から「しっぽとり」してみよう」
- * 「鬼はどうやって決める？」（鬼の決め方と、鬼を何人にするかは子どもたちと決める）



- * 「じゃ、しっぽを配ります」
(鬼になる子が決まったら、しっぽをつけて準備)
- * 「鬼になる子は、わかりやすいように、しっぽを頭にまくよ」
- * 「鬼じゃない子はおしりにしっぽをつけよう」
(ズボン〈スカート〉の後ろにしっぽをはさむ)



進め方

- ① 「しっぽがついたかなあ」
- ② 「手でそっとさわってみようかな」
- ③ 「じゃあ、しっぽをとられないように逃げてね、しっぽを取られたらここに戻ってきてね。スタート！」
- ④ 合図でしっぽをつけた子が逃げ、鬼が追いかけてしっぽを取る。
- ⑤ しっぽを取られた子は陣地（スタート地点）に戻る。



※⑦しっぽを取られた子は陣地（スタート地点）に戻るルール、⑧取られた子が鬼になって、鬼が増えていくルール（別のしっぽを頭に巻いたり、帽子を裏返しにかぶって鬼であることがわかるようにします）、⑨4人が電車のようにつながって後ろの子どもにしっぽをつけ4人がつながったまま、お互いのしっぽを取り合うルールもあります
※おとながしっぽをいっぱいぶら下げて、子どもが追いかけて取るというやり方もあります（追いかけてこのおもしろさを伝えることができます）。

ポイント

- ★「やりたくない」子どもには自信がなかったり、「取られたらどうしよう」と思い過ぎたり、「ルールがわからない」など、それなりの理由があります。「楽しそう」「やってみたい」と思えるようになるまで自分の中でも整理していく時間が欲しいのかもしれません。無理強いせず、本人の意思を尊重して見守りましょう。
- ★グループ対抗にすると、より仲間との共感や協力して成し遂げる達成感、楽しさが味わえます。
この遊びを通して、複数のしっぽを取った子は、まだ取れていない子にしっぽをあげるルールや、取られそうな子を誘って陣地に逃げる、呼び込むなど、友だちとのつながりを考えたり、深めたりすることもできます。ルールをひと工夫すると遊びの幅が広がり、どの子も楽しめます。
- ★時には、みんなと一緒に遊ばない子どもの姿があり、おとなは「一緒にしない子はだめ！」と見がちですが、子どもには子どものつもりや思いがあります。
子どもの育ちの姿からみて、提供している遊びが難しくはないか、子どもの興味とあっているかなど、子どもの気持ちに寄り添って考えてみることも大切かもしれません。
遊びの場面で子どもはどうしたいと思っているか、どうしようとしているかを見つけて、そこから始める方がいいので、見守ることも大事にしていきましょう。

手遊び 「アルプス一万尺」

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）
公平：対等な関係

ね ら い

- ・おとなとゆったり関わってもらう時間を通して人の心地よさを実感するとともに人への信頼、安心感を育む。
- ・友だちと遊ぶ楽しさを通して人の心地よさや人への信頼、安心感を育む。



対象

おおむね4歳～6歳
（おとなと子どもの2人組、または
友だちと2人組）



所要時間

10分～15分
程度



準備するもの

なし

やってみよう

こんな場面で

- ・子どもとゆったり向き合いたい時。
- ・子どもが退屈そうにしている時。
- ・何かの待ち時間を利用して。

遊び・活動への誘いかけ

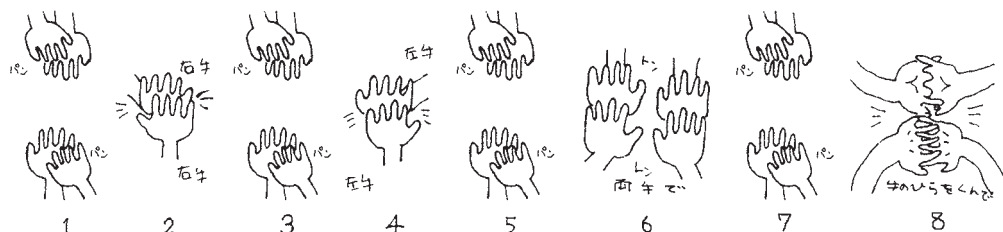
- * 「アルプス一万尺」って歌知ってる？
（歌って聴かせましょう）
（動作を見せながら）
- * 「こんなこともできるよ」
（ゆっくりと子どもに合わせて手合わせ）
▽何度か繰り返すことで歌も覚えていきます。

進め方

- ①「せっせっせーの」
相手の人と向き合い、両手をつないで上下に振る。
- ②「よいよいよい」
つないだ手を交差させる。
- ③「♪アルプス一万尺、小やりのうーえでアルペンおどりをさあおどりましょ♪」
(歌いながら) 1つ拍手→相手の右手と自分の右手を合わせる
1つ拍手→相手の左手と自分の左手を合わせる
これを繰り返す。
- ④「♪ラーララララララ ラーラララララ ラーララララララ♪」
「♪うらうら♪」
(歌いながら) 1つ拍手→相手の両手と合わせる、これを繰り返す。

※慣れてきたら、少し複雑な手合わせにしてもおもしろいですよ「♪アルプス一万尺
(1つ拍手→相手の右手と合わせる→1つ拍手→相手の左手と合わせる→1つ拍手
→相手の両手と合わせる→1つ拍手→両手を組んで 相手の組んだ手と合わせる。)

(資料1) アルプス一万尺のやり方



ポイント

★広く知られている「アルプス一万尺」の歌に合わせてリズムカルに手合わせを楽しむ遊びです。「もう大きいから」ではなく、4歳～6歳でもおとなと1対1で遊べることはうれしいと思っています。少しの時間でも楽しい遊びを通して触れ合うことで、子どもは「あー楽しかった!」という満足感を得て、人と触れ合う心地よさと遊びの楽しさを積み重ねていきます。

少しの時間があれば向き合って楽しめる遊びですが、手合わせが複雑過ぎると難しく感じてしまうので、単純な動きから始めて子どものリズムを大切に、ゆっくりと進めましょう。

慣れてきたら、子どもと一緒に手合わせのバージョンを考えたり、スピードアップしたりと変化させてもおもしろいです。

★保育所や幼稚園、子育て広場など子どもが集まる場所では、子ども同士の2人組や4～5人のグループで輪になって、歌に合わせて横の人と手合わせするバージョンも楽しいです。

ふたりぐみ電車リレー

尊敬・公平
反偏見

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）

公平：対等な関係

反偏見：不合理なことに気づき、表現する力の育ち

ね ら い

- ・友だちの気持ちに気づいたり、共感することで、「どうしたらぼくたち、わたしたちのグループが勝てるのかな？」と一緒に考える力を育む。
- ・走るが遅い子や走れない子への理不尽な発言をおかしいと感じ、「○○ちゃんもがんばってるよ」など表現する力を育む。



対象

おおむね4歳～6歳
(20～30人くらいまで)



所要時間

30分～40分
程度



準備するもの

電車用に結んだ縄またはフープ（2つ）・ゴール用テープ・アンカー用たすき

やってみよう

こんな場面で

「友だちのことを考えるきっかけがほしい」時。
「友だちと一緒に楽しかった」と感じてほしい時。

遊び・活動への誘いかけ

- * 今から2人組電車リレーしない？
- * このフープがバトンのかわりだからね。
- * 2人組になる子を決めてね。
- * 1人ぼっちの子いるよ、どうする？
- * どんなルールがいいかなあ。
(2人組の友だちのことを考えたルール)
- * 次は、走るグループを決めよう（2つに分かれる）。

進め方

- ①2人でトラックを走り、電車用に結んだ縄またはフープを次の2人に手渡す。
- ②最後の2人組は、2人でゴールテープを切る。
- ③見ている子は自分のグループを応援する。



※初めてのリレーという時は、勝ち負けではなく、「フープを渡す、受け取る」をメインに何度も繰り返して、走ること自体を楽しむリレーにするといいですね。

※結果のみにこだわらず、子どもたちには「自分の力を出し切って気持ちよかったね」「みんな自分なりにがんばったね」など声をかけていきたいですね。

ポイント

★できる・できない、速い・遅いの価値観が顕著に表れる活動なので、子ども同士の関係が十分に深まってから取り組むとよいでしょう。

おとなが決めてしまわずに、2人で力を合わせて走るためにはどうしたらいいか、ルールも含め、子ども自身が考えることができるよう、声かけしていきましょう。

（歩けない子、車イスの子などがある場合、どういう参加の仕方がいいのかーなど、その子たちもみんなと一緒にしたいと思っている気持ちが伝わる働きかけを）

なべなべ底抜け

尊敬・公平

キーワード

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）
公平：対等な関係

ね ら い

相手と気持ちを合わせる楽しさや協力してできた達成感を味わう中で、「自分ってイケてる」という自己肯定感や友だちと認め合う心を育む。



対象

おおむね4歳～6歳
（おとなと子どもの2人組、または
子ども同士2人組）



所要時間

10分～20分
程度



準備するもの

なし

やってみよう

こんな場面で

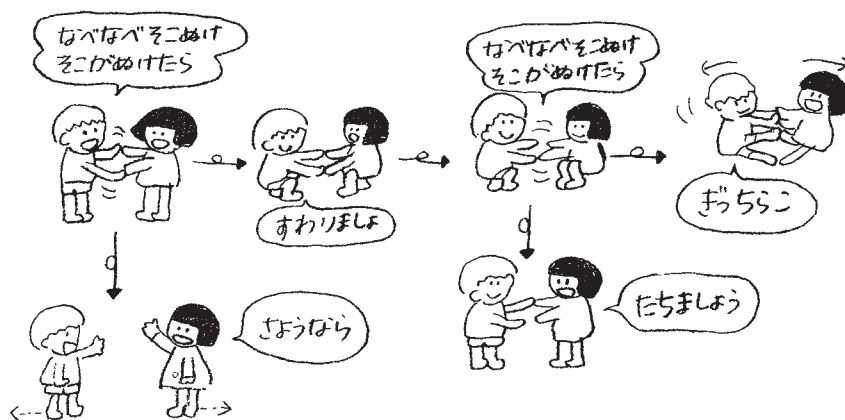
- ・子どもとゆったり向き合いたい時。
- ・子どもが退屈そうにしている時。
- ・何かの待ち時間。

遊び・活動への誘いかけ

- * ♪なべなべ底抜け♪って知っているかなあ。
（歌って聴かせましょう）
（子どもの手をとって動作をみせながら）
（両手をつないで歌に合わせて左右に揺らす）
- * 「底が抜けたら返りましょ」で、おとながリードしてくるん！と回してみましょ。

進め方

- ① 2人で向かいあい、手をつなぐ。
 - ② ♪ なべなべ底抜け ♪
つないだ手を左右に揺らす。
 - ③ ♪ 底が抜けたらかえりましょ ♪
くるん！と片方の手の下をくぐって背中合わせになる。
 - ④ ♪ なべなべ底抜け ♪
背中合わせのまま、つないだ手を左右に揺らす。
 - ⑤ ♪ 底が抜けたらかえりましょ ♪
くるん！片方の手の下をくぐって元に戻る。
- ※何度か繰り返すことで歌も覚えていきます。



※くるん！とまわってから、「さようなら」して違うパートナーと2人組になるやり方や、くるん！が難しい時は♪底が抜けたらすわりましょ♪とすわったり、船をこぐまねをするやり方もあります。

ポイント

★気持ちを合わせる楽しさが伝わってくる遊びです。くるん！と回れたときのうれしさは「やった！」という達成感にもつながります。家族でちょっとした時間に遊んでみるのも笑いあえていいですよ。みんなが輪になってくぐる時は1つの輪になるまで歌い続けたり、楽器を使って盛り上げたりすると楽しいですよ。子ども一人ひとりのリズムを大事にして遊びましょう。

★保育所や幼稚園、子育て広場など子どもやおとなが集まる場で、大きな輪を作って歌いながら全員でひっくりかえってみるのもダイナミックさがあり、楽しいです。



「100国フェスティバル」

多文化・尊敬
公平・反偏見

キーワード

多文化共生保育：多様な文化は当たり前

尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）

公平：対等な関係

反偏見：多様な文化への偏見や差別をなくす

ね ら い

- ・多様な文化背景（国籍・民族・人種・宗教・言語）を正しく理解する力を育む。
- ・それぞれの文化への自覚と誇りを高める。
- ・共に生きる仲間として行動しようとする力を育む。



対象

4歳～6歳

（クラス子どもたち全員と。時には保育所・幼稚園の行事として取り組むことも可）



所要時間

30分～40分
程度



準備するもの

外国の建物などの写真、小麦粉粘土や紙で作ったり紙に描いた外国の料理、外国の花、外国の歌を吹き込んだものなど
地球儀・国旗、外国の情報が載っている本やカタログなど

やってみよう

こんな場面で

- ・多様な文化を受け止め、行動する力を養いたい時。
- ・外国にルーツのある子どもがいる場合でその子どもに母国への自覚と誇り、自尊感情を育みたい時。
- ・まわりの子どもたち（保護者）に外国にルーツのある子どものことやその国のことについてもっと知って欲しい時。

遊び・活動への誘いかけ

- * 「今、みんなが住んでいる国はどこ？」
- * 「なんていう国？そう！日本という国だねえ。」
- * 「この国は、世界のどこにあるのかなあ。」
- * 「地球儀で探してみようか、あった！ここだよ。」
- * 「世界って広いねえ！世界にはいろいろな食べ物やお家や言葉があるよね。」
- * 「いろいろな国に行ってみたくない？」
- * 「日本とどんなところが違うのかなあ。」（子どもに聞いてみるといいですね）
- * 「言葉？服装？住んでいるお家？食べ物？肌や髪の色？遊ぶこと？いろいろあるってすてきだねえ！」
- * 「みんなの持っているクレヨンがひとつの色だけだったらつまらないよね、『いろいろある』ってとても楽しくていいよね。」
- * 「みんなもたくさんの国のこと知りたくない？」



《外国にルーツのある子どもがいる場合》

- * 「じゃあ、今度は〇〇ちゃんの国はどこにあるかなあ、みんなで探してみよう。」（地球儀で探す）
- * 「〇〇ちゃんの国って、どんなところだろうね。」

進め方

- ① 「その国って、寒いのかなあ、暑いのかなあ。」
- ② 「どんな花が咲いているんだろう。」
- ③ 「どんなごはんを食べているのかなあ。」
- ④ 「どんなことして遊んでいたのかなあ。」
- ⑤ 「どんな歌を歌っていたのかなあ。」
- ⑥ 「みんなは、どんなことを知りたいかなあ。」



- ⑦「写真とか、本とかあるけど、一緒に見てみようか？」
- ⑧子どもたちが気がついたことや言葉を取り上げてみんなに返す。
- ⑨いろいろな国をみんなで部屋の中につくることを提案することもできます。
(この場合⑬の活動につながります)

《外国にルーツのある子どもがいる場合》

- ⑩〇〇ちゃんの国のことをお家の人に聞いてみよう。
(①～⑧の活動などを通して十分に子どもたちと共有できたあとに)
- ⑪みんなの部屋を〇〇ちゃんの国にしてみようか！
- ⑫何を飾ったらいいかなあ？どうしたら〇〇ちゃんの国みたいになるかなあ。
(ここからは、〇〇ちゃんをはじめ、子どもの声を取り入れながら展示を進めていく)
- ⑬他の人を招待する場合は、来てくれた人（子どもたち・保護者・職員）の案内係やそれぞれの展示を説明する係、その国の歌を歌う人など役割を分担したり、交代したりして楽しむ。

* 子どもの声、反応は？

- ・ 遠いなあ（地球儀を見て）。
- ・ どんなごはん食べているのかな？
- ・ ディズニーランドあるのかな？
- ・ 何して遊んでいるのかな？
- ・ どんな部屋で寝ているのかな？
- ・ 煙突とかあるのかな？
- ・ 「遊ぼう」ってなんていうのかな？

※外国にルーツのある子どもがいる、いないに関わらず、取り組むことで各国の文化の良さに触れ、尊重することにつながります。

※外国にルーツのある子どもがいる場合に、この活動を取り入れる時は、事前にその保護者にねらいや活動をきちんと伝えた上で、必ず了解を得ましょう。そして、その子どもには「〇〇ちゃんの国のことをみんなで考えてもいいかなあ」と聞くようにしましょう。

※まわりの保護者にも、今の子どもたちの状況と合わせて、活動の意図をきちんと理解してもらえよう、クラスだよりや連絡ノートなどを活用して伝えられるといいですね。

ポイント

★その国の情報を十分に共有してから「フェスティバル」に持っていきましょう。

（言葉の不安がある場合は、気持ちも含めて伝わるよう、地域の国際関係のボランティア団体などに通訳をお願いしましょう）

自分たちの日常とつながる「情報」（食べ物、季節、遊び、寝る時の様子、遊びにいくところなど）を、保護者から聞いておくか、直接、子どもたちに伝えてもらう場を設けてもいいですね、その国の絵本や料理を作ってもらって試食できる機会などがあると盛り上がります。

子どもたちはどんなことを知りたいと思っているか、話し合っ展示するものを決めるとよいでしょう。

★韓国・朝鮮の人たちをはじめ、さまざまな国の人たちが日本で暮らしている状況の中で、お互いの文化を知り、認め合うことは、とても大切なことです。その国の文化を正しく理解し共有することで、それぞれの文化への自覚と誇りを高め、多様な文化を当たり前と受け止める感性が育まれます。

★事前に取り組み内容を保護者に伝えて、理解や協力を得ておきましょう。

★保育所・幼稚園あるいは子育て広場などで、外国にルーツのある子どもに出会えると、まわりの子は「違う子」として受け止め、関わりを持とうとしない姿を見せることがあります。

「正しく知ること」「お互いの文化の良さに触れること」「お互いの文化を尊重すること」など、お互いに知り合う機会をおとなが意図し、それぞれの国を肯定的な視点から伝えることで、知らないことから生まれる偏見や差別を克服するきっかけとなります。（P.8「③偏見をなくす力」P.35「違いを正確に知ること」参照）

★子どもは「〇〇ちゃんは何で髪が黒くないの?」「□□さんはみんなと違うね」など、初めての出会いであればあるほど、素直にさまざまなことを言葉にします。

おとなが「そんなこと言っちゃだめ」と言ってしまうと、子どもは「これは、聞いてはいけないこと」ととらえ、正しく知る機会が奪われ、多様であることの素晴らしさに触れないまま「違う子」として偏見をますます深めかねません。「髪の色って黒だけじゃないよ、いろんな色があってすてきだよね」など、子どもの疑問に正しく答える中で肯定的な視点から「違うことの豊かさ」に気づかせていきましょう。

参考絵本 多文化共生

『ええぞ カルロス』

『かきねのむこうはアフリカ』

『サラフィナ!』

『世界のあいさつ』

『世界のだっことおんぶの絵本』

『せかいのひとびと』

『手で食べる?』

『ぼくのアフリカ』

長澤 靖浩 文／はせがわ さちこ 絵 大阪市教育委員会

バルト・ムイヤールト 文／アンナ・ヘグルンド 絵／

佐伯 愛子 訳 ほるぷ出版

ムボンゲニ＝ンゲマ 原作／マオ アキラ 文／多田 治良 絵 汐文社

長 新太 作／野村 雅一 監修 福音館書店

エメリー・バーナード 文／ドゥルガ・バーナード 絵／

仁志田 博司・園田 正世 訳 メディカ出版

ピーター・スピーアー 作／松川 真弓 訳 評論社

森枝 卓士 作・写真 福音館書店

イングリッド・メンネン／ニキ・ダリー 文／ニコラース・マリッツ 絵／

わたなべ しげお 訳

「みえないってどんなこと？」 ～感じよう！知り合おう！～

障がい児共生
尊敬・公平・反偏見

キーワード

障がい児共生保育：障がいのある子どもと共に育ちあう保育
尊敬：自分も友だちも大切な一人ひとり（自己肯定感・他者への尊敬）
公平：対等な関係
反偏見：不合理なことに気づき、表現する力の育ち

ね ら い

- ・「見えない世界」を体験し、「聴く・触れる・匂う・味わう」など「見る」こと以外の世界の大切さを知り、仲間の立場に共感し、自分なりに行動する力を育む。
- ・自分への誇りや自己肯定感を育む。



対象

おおむね4歳～6歳
(20人～30人まで)



所要時間

20分～30分
程度



準備するもの

アイマスクかタオル
絵本『みえないってどんなこと？』（星川ひろ子文・星川治雄写真）岩崎書店
P.51の絵本参照

やってみよう

こんな場面で

- ・さまざまな障がいのある子どもがクラスにいる時。
- ・障がいのある子を「〇〇ちゃんは何もできない」と思っている時。
- ・「〇〇ちゃんには先生がついているからぼくらは何もなくていい」と思っている時。
- ・〇〇ちゃんに自分への自信を育んでほしい時。

遊び・活動への誘いかけ

* 子どもたちを集めます。

「この前、歩いていたら目が見えない人が歩いていて、信号で困ってたからちょっとお手伝いしたのよ」

「見えないってどんなことかなあ？」

「目をつぶってみて」

「何か見える？」

「まっくらだねえ」

* 「これ何か知ってる？アイマスクっていうの」

「次は、アイマスクをしてみよう、〇〇ちゃんつけてみて」

「どうかなあ、こわくて動けない？だれかに手をつないでもらう？」

* もう一人の子どもに手をつないでもらって少し歩いてもらいます。

「だれかの肩につかまって動いてみる？」

* 肩につかまって歩いたり、「こっちよー」と声をかけてもらいます。

「友だちに声をかけてもらって歩くこともできるね」

「それだとう？大丈夫？1人より、ずっと安心だね」

「じゃあ、順番にアイマスクをつけて2人組で歩いてみよう」

進め方

①2人ずつ組になり、片方がアイマスクをつける。

②自由に歩いてみる。

③交替する。

④アイマスクをしていろいろな物にさわり、あてっこする（ボール、りんごなど）。

⑤子ども全員が経験してから絵本を読む。

※絵本はなくても取り組むことができます。



* 子どもの声、反応は？（アイマスクをつけて）

- ・ うわっ！まっくら
- ・ 何も見えない
- ・ こわーい！
- ・ 友だちと手をつないだら安心
- ・ 肩に手をおくと安心
- ・ ○○ちゃんはいつもこんなふうに見えないの？

※この活動を取り入れる時は、事前に障がいのある子どもの保護者にねらい・活動をきちんと伝えたくて、必ず了解を得ましょう。そしてその子どもには「○○ちゃんのことをみんなで考えてもいいかなあ」と聞くようにしましょう。

※見えない世界を十分に体験してから、絵本に出会わせてみましょう。子どもたちは、体験を積んだ後にこの絵本と出会うことで、体験と重ね合わせて見ることができます。

※その他、アイマスクをしたままで、ものにさわったり、匂いをかいだり、なめたりして名前のあてっこをすることで五感を働かせる遊びも試みることができます。

※日々の生活や活動を通して、個々の子どもの世界をどのように知り合うか——という視点から見ると「今、目の前にいる○○ちゃんの世界を知ってもらう」ために個々の特性に合わせ、さまざまな状況を応用して取り入れることも可能になります。

（車イス体験、はって生活してみる、○○ちゃんが感じている音の大きさ、響き方など）

※障がいのある子がいない場合でもこの活動に取り組むことで個々の気持ちを受け止め、共感し合う力など人と豊かに関わる力へとつながります。

ある保育所での取り組み

※目の見えない友だちがいるクラスでは、アイマスクをした子と2人組で当番活動に取り組むなど、行動をともにすることで、「見えないことの重み」や自分の役割の重要性を認識していくなど、貴重な体験をしています。

「見えること」が当たり前と思っていたまわりの子どもたちには衝撃の体験だったでしょう。

そうすることで初めて「見えないこと」の不自由さに気づき、自分にできることは何かを考え、行動し始めるのではないのでしょうか。

一方、目の見えない友だちはこの活動を通して、アイマスクをした友だちと手をつなぎリードしたり、自分の気持ちを生き生きと言葉で伝えるなど、まわりから頼られる存在となり、自分への自信を大きく育んでいきました。

こうしてともに育ち合う体験を積んだ子どもたちは、個々の気持ちを受け止め、共感し合う力など、豊かな人間性を育んでゆくことでしょう。

ポイント

★障がいのある子と生活や遊びをともにするには、まず、知り合うことがスタートになります。

知り合う機会を与えないことは、障がいのある子への共感を育めないということ、そして、知らないこと

は偏見、きめつけ、差別につながると言われています。

子どもたちは、障がいのある子を一体どのように見ているのか、全く無関心なのか、排除しているのか、関わりを持ちたいけれど、どうすればいいかわからないのか、子どもたちの姿から学んでみませんか？

★他にも、さまざまな障がいのある子どもたちが保育所・幼稚園や地域で生活していますが、決めつけた見方や関わりがある時は、多面的に仲間の姿が見える楽しい活動を通して見方や関わりが変わることをめざしていくことが必要になります。

（○○ちゃんと一緒に楽しいなあ）

★子どもは、見えにくいとか歩きにくいとか大きな音が苦手など、個々の特性を理解すれば、そこから多様な関わりを学んでいきます。そして、自分の自信にもつながり、友だちに関わる力が豊かになり、それが、障がいのある子にとっても心地いい集団となります。一人ひとり違うけれど、違いをマイナスイメージで受け止めない、違うということは一人ひとり関わり方も違うんだと気づいてゆく、そんな育ち合いを大切にしたいですね。

参考絵本 障がいのある子と共に

『ありがとう シンシア』	山本 由花 文／小田 哲明 写真／太田 朋 絵 講談社
『おとうさんといっしょに』	白石 清春 文／いまき みち・西村 繁男 絵 福音館書店
『おとがするしんごうき』	村瀬 継弥 文／オオノ ヨシヒロ 絵 大阪市教育委員会
『おにごっこする？』	今井 美之 文／岡島 礼子 絵 大阪市教育委員会
『かっくん ～どうしてボクだけしかくいのか？～』	クリスチャン・メルベユ 文／ジョス・ゴフィン 絵／乙武 洋匡 訳 講談社
『ゴンタとカンタ』	つちだ よしはる 作 PHP研究所
『さっちゃんのまほうのて』	たばた せいいち 著 偕成社
『十人十色なカエルの子』	落合 みどり 文／宮本 信也 医学解説／ふじわら ひろこ 絵 東京書籍
『14の心をきいて』	つちだ よしはる 作 PHP研究所
『手エ つなごうや』	池内 エミ子 文／中田 弘司 絵 大阪市教育委員会
『てではなそうきらきら』	佐藤 慶子 文／沢田 としき 絵 小学館
『天使と話す子』	エスター・ワトスン 作／山中 康裕 訳 BL出版
『となりのしげちゃん』	星川 ひろ子 作・写真 小学館
『どんなかんじかなあ』	中山 千夏 文／和田 誠 絵 自由国民社
『のんちゃん』	ただの ゆみこ 作 小峰書店
『ペカンの木のぼったよ』	青木 道代 文／浜田 桂子 絵 福音館書店
『ぼくのおにいちゃん』	星川 ひろ子 作／星川 治雄 写真 小学館
『みえなくても だいじょうぶ？』	フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク 文／フェレーナ・バルハウス（絵）／ささき たづこ（訳） あかね書房
『見とってな！ けんた！』	林 やよい 文／たかい たかこ 絵 大阪市教育委員会
『やあ、すてきななかまたち！』	トゥリシア・ブラウン 文／フラン・オーティス 写真／偕成社編集部 訳
『わたしたち手で話します』	フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク 文／フェレーナ・バルハウス（絵）／ささき たづこ（訳） あかね書房
『わたしたちのトビアス』	ヨルゲン・スベドベリ 文／セシリア・スベドベリ 編／山内 清子 訳 偕成社
『わたしの足は車いす』	フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク 文／フェレーナ・バルハウス 絵／ささき たづこ 訳 あかね書房

※乳幼児向けプログラム参考資料

『人権保育の理論3 32分でわかる4の段階』 玉置哲淳 編著 シルク発行

乳幼児と保護者向けプログラム

- ① 身近な素材であそぼう ①
- ② 身近な素材であそぼう ②
- ③ 手づくりおもちゃをつくろう
～交替で見守り参加～

- ・  ファシリテーターが話す内容を示しています。
- ・ ※ ファシリテーターが進める際のポイントを示しています。

▶ 子どもを尊敬するってどんなこと？

「どの靴下にする？」

ある保育所の2歳児クラスでのエピソードです。園庭で靴下がぬれてしまったCちゃんが担任の先生と一緒に靴下を履き替えに保育室にやってきました。担任の先生は、Cちゃんのロッカーに入っていた3足の靴下を全部出してからCちゃんに問いかけました。「Cちゃん、どれにする？」。Cちゃんは少し考えてから、「これ！」と1足の靴下を選び、担任の先生に手伝わってもらいながら靴下を履き替えました。

この一連のやりとりは、当たり前のことのように、ごく自然に行われていました。しかし、このちょっとしたやりとりの中に、「おとなが子どもを1個の人格をもった存在として尊敬する」という姿勢の1つの表れがあると感じました。

「自分で選ぶ」ことの大切さ

子どもは小さくても自分の思いや意志を持っています。しかしながら、おとなはしばしば、そうした事実を忘れ、あるいは無視して、一方的におとなの思いを押し付ける形で子どもに関わりがちです。そうする中で子どもは、一人の人として「自分で決める」「自分で選ぶ」という機会を奪われがちなのではないでしょうか？

子どもは育ちゆく存在なので、おとなが適切に教えたり、方向づけたりすることも大切です。しかしながら、子ども自身が、「自分のことを自分で決める」中で、「わたし」として育つということは、人として生きていくための根っこを育てる乳幼児期において、極めて重要なことなのです。そうした意味で、子ども自身が自分の思いや意志を受け止めてもらう体験を積み重ねていくことが大切になるのです。そして、「子どもを1個の人格をもった存在として尊敬」しているおとながいることで、それは可能になるのです。

靴下を選ぶ。本当にちょっとしたことですが、このような日常的な子どもとの関わりの中で、Cちゃんの担任の先生は、Cちゃんが「自分で選ぶ、自分で決める」という体験を保障していたのです。

自分自身がどのように子どもと関わっているのか、振り返ってみませんか？



身近な素材であそぼう ①

キーワード 自己決定、自己選択、対等

ね ら い

- ・遊びをきっかけにして、子どもと子ども、子どもとおとな、おとなとおとな、いろいろな交流の中で、気持ちが通じあう体験を積み重ねる。
- ・おとなも子どももリラックスして楽しみ、生活の中に遊びがいっぱいあることに気づく。



準備するもの



所要時間

60分

大小のビニール袋・スーパーの袋を合わせて人数分
大小布・シーツ・ふろしき・バスタオル：各1～2枚

かさ袋・資料：人数分

プログラムのおおまかな流れ

- | | | |
|------------|--------------------|---------------|
| 5分 | 1. 受け入れと自己紹介…………… | ●気持ちをほぐす |
| 10分 | 2. みんなでこんにちは…………… | ●リラックスして楽しむ |
| 15分 | 3. ビニール袋であそぼう…………… | ●子どもが遊びを決める |
| 15分 | 4. 大布も出して楽しもう…………… | ●子どもと遊びをつくり出す |
| 15分 | 5. 片付けとふり返り…………… | ●自分の気持ちを感じる |

手 順

はじめに

- ・丸くなって座る。資料「あがりめ・さがりめ」を配布する。

※「会場の作り方」は、
P2～3参照。

1 受け入れと自己紹介 **5分**

- ・荷物の置き場所を案内しながら笑顔で迎える。
※子どもが走ったりすることを制するのではなく、参加してくれてありがとうの気持ちで見守る。



〇〇です。みなさんとの出会いを楽しみにしてきました。みなさんはいかがでしょう。わたしは少し緊張しています。みなさん、一緒に歌ってくださいね。
♪「大きな栗の木の下で」♪などをゆっくりと2～3回くり返す。

2 みんなでこんにちは 10分



ありがとうございます、みなさんの声が聞けて、ほっとしました。先ほどお配りした資料は、お家で読んでいただいたらいいのですが、「わらべうたは子どもがつくりだしたものだ」と書いてあります。ご存知でしたか？ わたしは、この資料から知りましたので、配布させていただきました。

- ・「あがりめさがりめ」を、子どもと向き合ってやってみる。

※隣の人と向き合って歌ったり、子どもの好きな歌や喜ぶことの情報交換をしよう。
※誰かのお気に入りの歌などをみんなでまねて、場をほぐす。



わらべうたは、このように歌わなければならないという決まりはないですね。同様に、子どもと遊ぶことも、こう遊ばなければならないということではなくて、子どもとつくり出すものだと思います。今日は、ビニール袋と布を用意しています。子どももおとなもみんなで声を聴き合いながら、遊んでみましょう。

3 ビニール袋であそぼう 15分

- ・いろいろなビニール袋やかさ袋をかごに入れて、何ヵ所かに置き自由に使う。
- ・シャカシャカの音を楽しむ。揺らす。空気を入れたり、しぼませたりする。
- ・風船にして飛ばす。子どもが持って走るのを見守る。
- ・となえうた（節のない歌、語り歌）に合わせてみんなで飛ばす。
♪「たこたこあがれ、たこたこあがれ くもまであがれ てんまであがれ それ～」♪
♪「うえからしたからおおかぜこい こいこいこい それ～」♪

※様子を見ながら、「おとなもしたいことをやってみてね」と袋風船のつき合いっこなどに誘ってみる。

ワンポイントアドバイス

ビニール袋を口に入れてひきちぎる子どももいるので、みんなで気にかける。

4 大布も出して楽しもう 15分

- ・みんなで布を持って揺らす。

※子どもが布の下に入ったり、上に乗ったり、布にビニール袋を乗せたり、子ども自身がやってみようとする気持ちを大切にしながら楽しむ。

※「持ってもらえますか」「一緒にしよう」など、参加者同士が声をかけ合える間を大切に、少人数での遊びにも誘う。

5 片付けとふり返し 15分

- ・かさ袋を踏むとパンと割れたり、プシューと空気が抜けることを楽しむ。
- ・ビニール袋をほどいてたたみ、破れた袋は捨てる。
- ・布をたたむのは、参加者に任せる。



きれいに片付けました。みなさんの笑顔や、声をかけ合う姿に安心するのか、子どもたちもうれしそうで、わたしも楽しかったです。地域の中でも、互いに声をかけ合い、みんなで過ごせるひとときをつくってくださいね。

それにしても、改めて生活の中には遊びがいっぱいあると気づかされます。おもちゃがなくても、子どもの関心で何でも遊びになります。ハイハイが始まるころには、引き出しの物など出して困りますが、子どもは自分で見つけて自分で遊びます。与えられるのではなく、選ぶことがおもしろいのかもしれません。使ってもいい物を引き出しに入れておくなど、ちょっと意識してみるのもいいかもしれません。今日はありがとうございました。



(2)「原音楽」としてのわらべうた

わらべうたあそびは誰がつくり出したのでしょうか。それは誰か子ども、子どもたちというほかはありません。子どもたちはあそびの中で、歌い、走り、手をつなぎ、からだを動かして、自らを育ててきました。器用に手の指を動かすあそびはやがて、生活の仕事、労働に、そして歌や踊りの表現を育ててきました。何よりも仲間と遊んだという経験は、“原仲間”として、どこへ移り住もうが、他者と支えあって生きていくことを身につけていくのです。遊ぶためには、その前に、おとなや大きい子から「ああ、遊んでもらった」という経験があることが、とても大事であること、子ども自身から、また保育現場の実践の中から学びました。からだがかかたい、よくこころふ、友だちと遊ばない、遊べない、など、子どもの現状が出される中で、そんな子どもたちは遊んでもらった経験が少ないことを知らされました。そして、遊べない子ども、遊ばない子どもは、本当は一番切実に遊びたいと訴えていることに気づかされました。

略

子どもの育ちと、からだ、ことばのリズムが一つになったわらべうたを「原音楽」「原表現」として、その本質をもっと学んで、子どもたちと遊び続けなければと思います。わらべうたそのものがもつすじみちによって、わらべうたあそびは、自分や自分たちをあそびの中で育てていくためにつくり出されたものなのです。

たぶんみなさんもご存知の「あがりめ さがりめ」のあそびは、

- 軽く指先でめじりをあげ
- 次にめじりをさげ
- ひとまわりして
- ねこのめでめじりを外側から内側におす（この時、ニヤオーといったりする場合も）というやり方だと思います。

今回は、脚を使った「あし」版「ねこのめ」を試みました。

- ① あがりめ（両足を上にあげます）（図1）
- ② さがりめ（両足をおろします）（図2）
- ③ ぐるりとまわって（両足をもつてひとまわりします）（図3）
- ④ ねこのめ（両足をひざのところでやさしくまげます）（図4）

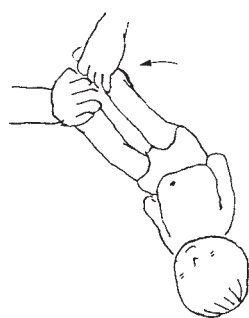


図1

あがりめ

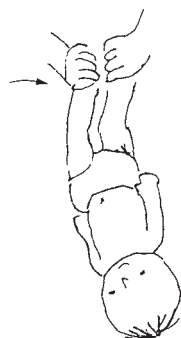


図2

さがりめ

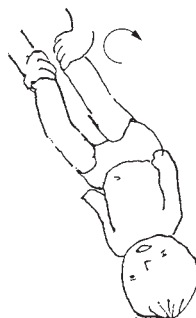


図3

ぐるりと
まわって

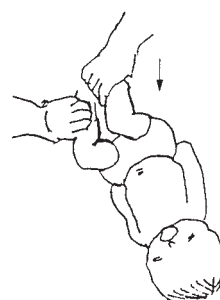


図4

ねこのめ

身近な素材であそぼう ②

キーワード 楽しさの共有、協働

ね ら い

- ・遊びをきっかけにして、子どもと子ども、子どもとおとな、おとなとおとな、いろいろな交流の中で、気持ちが通じあう体験を積み重ねる。
- ・子どもをみんなで見守り、いろいろな遊び方や過ごし方を認め合う。



準備するもの



所要時間

80分

新聞紙・チラシ：1人2～3枚
ガムテープ・セロテープ：各2～3個
資料1・2・3：人数分

ダンボール箱：2～3人に1つ
片付け用ゴミ袋：2～3枚

プログラムのおおまかな流れ

- | | | |
|------------|--------------|-------------|
| 5分 | 1. 受け入れと自己紹介 | ●ねらいを共有する |
| 10分 | 2. みんなでこんにちは | ●心地よさを感じる |
| 15分 | 3. 遊びをキャッチ | ●遊びを見つける |
| 30分 | 4. 遊びの展開 | ●共に楽しむ |
| 20分 | 5. 片付けとふり返り | ●気持ちの変化を感じる |

手 順

はじめに

- ・丸くなって座る。資料1「からだ・ことば・リズム」を配布する。

※「会場の作り方」は、
P2～3参照。

1 受け入れと自己紹介 **5分**

- ・荷物の置き場所を案内しながら笑顔で迎える。

※開始前に走り回る子どもが多いようであれば、「場に慣れるのが早いですね」など、保護者とおしゃべりする。



こんにちは〇〇です。参加してくださってありがとうございます。今日は、子どもたちや保護者のみなさんから、いろいろな遊びのアイデアをいただけるのではないかと、楽しみに来ました。どなたにとっても居心地の良い時間を、みなさんとつくりだせたらうれしいです。よろしくお願いします。

※笑顔で落ち着いて語りかけると、子どもも聞いてくれるので、1人ずつ順に目線を合わせる気持ちでゆっくりと話す。

2 みんなでこんにちは 10分

- ・資料1の「げんこつやまのたぬきさん」と「いたずらきゅうり」をする。



「げんこつやまのたぬきさん」は、いつもあまり使わない身体の動きが入っているとお配りした資料に書いています。じゃんけんポンを理解していなくても、子どもと「手が出たね」など喜び合いたいです。

「いたずらきゅうり」は寝ころぶのをいやがる場合もあります。ひざの上で向き合ったり、抱いたまま背中であってもらってもいいですよ。何回もしていたら、子どもがおとなにしてくれる時もあったりしますね。

3 遊びをキャッチ 15分

- ・新聞紙、チラシ、ダンボールを出す。
- ・どう遊ぶかは、しばらくは参加者に任せる。
- ・輪に入り、遊びの実況中継をする。

※実況中継は、「チラシを見えていますね」「ダンボール箱を押しています」「新聞を広げていますね」など、子ども自身がする単純な行為そのものを取り上げ、評価はしない。「そばで見守ってくれるから、遊べるのですよね」「お友だちを意識しているのかな」など、お隣の人と自己紹介し合ったり、気軽におしゃべりしてもらうように声をかけていく。

ワンポイントアドバイス
チラシが重なった上を歩くとすべりやすいので、参加者にも気にかけてもらう。

4 遊びの展開 30分

- ・下記の例を参考に展開させていく。
新聞紙パンチ：おとなが両端を持つ。子どもがパンチして破る。
びりびり紙吹雪：みんなで折り紙くらいの大きさに破って紙ふぶきで飛ばす。
新聞紙プール：びりびり破り床の上にあつめて泳ぐ。段ボール箱に入れて遊ぶ。
新聞ボール：破った物を集めて丸める。
新聞ボールめくり：丸めたものをめくりながらばらばらにする。

- ・【資料2】ほうき 【資料3】 チラシあらかるとを配布する。



いろいろな遊び方や過ごし方がありますね。
新聞紙の紙吹雪もみんなでしたら楽しいです。新聞ボールになったと思うとばらばらになったり、ダンボールに新聞を入れたり出したりも楽しいですね。
「ほうき」と「チラシあらかると」という資料をお配りしましたので、またお家でも遊んでみてください。
子どもたちをみんなで見守ってください、ありがとうございます。○分まで一緒に楽しみましょう。

ワンポイントアドバイス

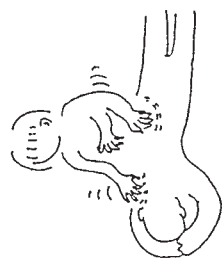
たくさん破る場合は、紙の粉がのどを刺激することもあるので、換気を良くして遊ぶ。

5 片付けとふり返し 20分

- ・ゴミ袋等に入れて大玉をつくる。
- ・ダンボールちゃん（目を描き、口をくり抜く）に、新聞で食べものをつくり、「おにぎり」「ハンバーグ」など、「どうぞ」と食べさせるのも楽しい。



片付けも遊びになりましたね。たくさんの遊びが広がり楽しかったです。長い時間、同じ遊びを楽しんだお子さん、すみっこに居場所を見つけていたお子さんもいましたね。みなさん子どもの気持ちを大切に、参加くださってありがとうございました。おとなの方にとっても心地いいひとときになったでしょうか……。子どもの遊びは、その子その子でいろんな遊び方があっていいと、わたしは改めてそのことを感じていました。今日はありがとうございました。



① 塩をまいて
(塩まいてパッパ パラパラバラ)



② すりこんで
(すりこんで シコッシコッ すりこんで シコッシコッ シコッシコッシコッ)



③ 板ずりして
(ころがして コロコロ ころがして コロコロ コロコロコロ)



④ すーつと洗って
(水あらい サーサー)

⑤ こまかくきざんで
(トントントン トントントン どこが気持ちいいかってね)



最後は、いだけきまーす。好きなところ
がらつまんで、ムシヤムシヤムシヤ。
おいしがった。ごちそうさま。
あぁ、いい気持ち、で交代です。

shika.

1

からだ・ことば・リズム

理論編

ムに合わせてすることができます。指先が、筋肉がどうのこうのといった難しいことはなく、楽しみながら、おとなと子ども、子どもと子どもが自ら育っていく最良の質(「常民」の子育て法)がそなわっているといえます。

私たちはこの何年間、いろいろ工夫しながら、各地で少しづつありますが「いたずらきゅうり」体操を伝えあってきました。

①塩をまいて 寝そべったきゅうりさんに指先でとんとん ②すりこんで

手のひらで塩をすりこするように ③板ずりころころ ④すーつと洗って

首から足へサーと一息で ⑤とんとんと切っていただきます ごちそうさま そして交代

1 手あそび・からだあそびの意味

私たちが日常何気なくしているあそび、動作をあらためてみつめなおしてみると、いかにからだ・ことば・リズムが密接に結びついているかがわかります。いくつかの例で確かめてみましょう。

たとえば、よく行なわれている「げんこつ山のタヌキさん」という手あそびをみてみましょう。

- (1) げんこつ山のタヌキさん(両手をにぎって上下に交互ふり)
- (2) おっぱい飲んで(両手指を閉じたり開いたり)
- (3) 寝んねして(手を合わせ首のところへもってきて首を左右に曲げる)
- (4) 抱っこして(抱っこ動作)
- (5) おんぶして(おんぶ動作)
- (6) またあした(手をにぎり、腕を回旋してジャンケンポンをする)

このあそびの中には、手(腕)、指のあらゆる動作が含まれています。そして、小さい子にはゆつくり、その子のリズ

ほうき

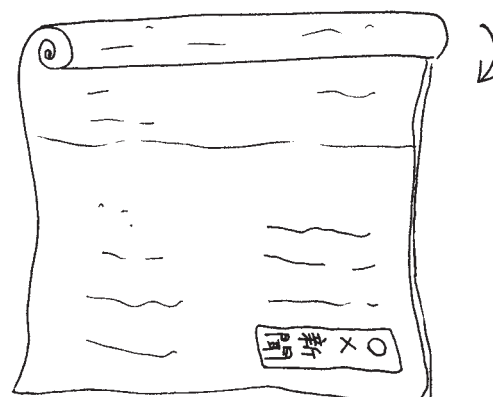
・新聞紙

・はさみ

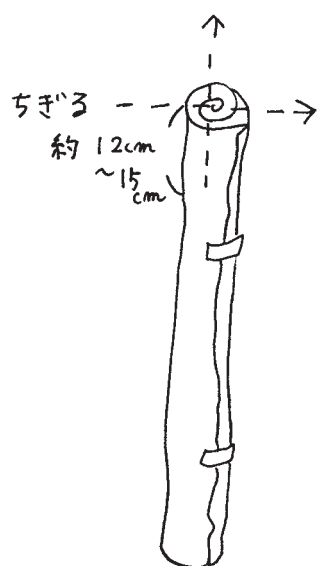
・テープ



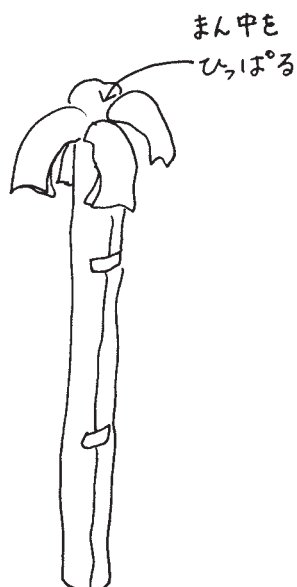
4~5枚



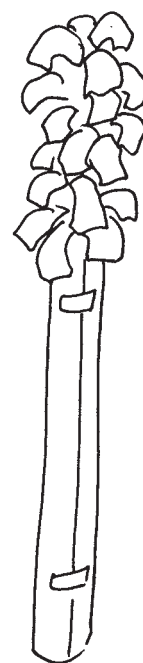
① 新聞紙 4~5 枚をふんわり丸める。



② テープでとめて、十字に切り込みを入れる。



③ 真ん中をひっぱる。



あそび⑨

チラシあらかると

チラシあらかると

見ているだけでも楽しいね！

新聞に折り込まれてくるカラフルなチラシ！

貼りつけたり、巻いたり、丸めたり、いっぱい、あそべます。

①チラシでさかなつり

チラシを丸めて作った釣り竿で、チラシの切りぬきを釣ろう。
獲物の切り抜きは台紙を貼って補強し、適当なところにクリップを。
釣り竿にはたこ糸を結んで、磁石のエサもつけよう！

【用意するもの】

チラシ、はさみ、セロハンテープ、のり、台紙になる紙、
クリップ、たこ糸、磁石

②チラシでおかいもの

切りぬいてお買い物ごっこ。

③チラシでカルタ カレンダー

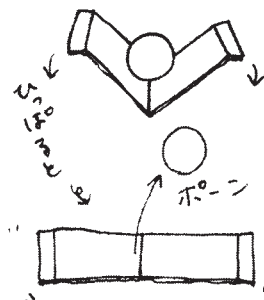
切りぬいて簡単カルタやカレンダーを作ろう。

【用意するもの】

チラシ、はさみ、のり、台紙になる紙

④チラシでとばそう

発射台付きロケット。
チラシを図のように
折り目をつけると、
よく飛んでびっくり！



⑤チラシでわなげ

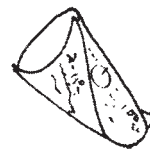
チラシのボールをねらってチラシの輪なげ。

⑥チラシでメガホン

厚手のチラシで作ってね。

⑦チラシでキャッチ

超簡単！すぐに作れてあそべるよ。
丸めたボールをメガホンでキャッチ！



【用意するもの】

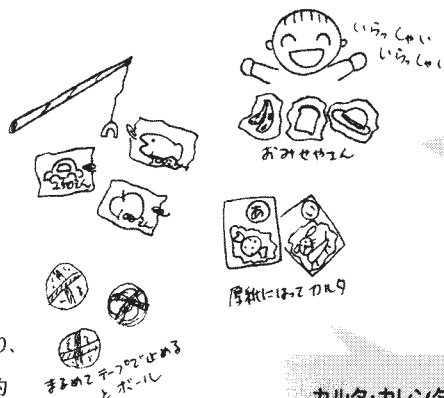
チラシ、セロハンテープ、はさみ、
⑤と⑦のボールは厚手のチラシ

あそんでみたら…

切りぬくものをさがすのが楽しくて、チョキチョキ切るのもまた楽しい！切りぬいたものを台紙に貼るだけで、いろんなあそびに使えるよ。

何でも売ってるお店やさん、すごい！

さかなつりで魚の切り身を釣ったり、野菜を釣ったり、なんでもありもおもしろいね。子どもはくっつけて釣り上げるのが大好き！チラシの釣り竿なら、転んだりしても柔らかいから安心です（細くきつく巻くと、硬い棒になってしまうので気をつけてね）。



絵を描いたり、作ったりすることが苦手な人でもだいじょうぶ。まだ、参加者同士、あまり知り合っていないサークルなどのあそびとしても最適です。

カラフルで手も汚れない。
いろんな色があり、いろんな厚さがあるのがうれしい！あそびによって、使い分けよう！

カルタ・カレンダー作りは、おとなが夢中になってしまう。子どもは傍らでチラシをびりびりチョキチョキしながら、自分のあそびを楽しんでいることも。

手づくりおもちゃをつくろう

～交替で見守り参加～

キーワード 対等、安心、信頼

ね ら い

- ・遊びをきっかけにして、いろいろな交流の中で、気持ちを通じ合う体験を積み重ねる。
- ・自分の子どもから目を離し、他の子どもを見守る経験から、他の子も自分の子も大切だと感じる。



準備するもの



所要時間

80分

ラベルのついた空ペットボトル：人数分

牛乳パック・空き容器：2～3人に1つ

資料2：人数分

長机：2本（きらきらペットボトルをつくる人数に合わせる）

※持参してもらう物：はさみ

あればペットボトルや牛乳パック（洗って乾かしたもの）

チラシ・薄紙：1人2～3枚

セロテープ：1～3つ

はさみ：予備として2～3本

プログラムのおおまかな流れ

- | | | |
|------------|------------------------------|--------------|
| 10分 | 1. 受け入れと自己紹介…………… | ●ねらいを共有する |
| 15分 | 2. みんなでこんにちは…………… | ●みんなで楽しむ |
| 40分 | 3. 手づくりおもちゃづくり／交替で見守り参加…………… | ●子どもの力を見つける |
| 15分 | 4. 片付けとふり返り…………… | ●人の子も自分の子も大切 |

手 順

はじめに

- ・資料2「きらきらペットボトル」に○か△を記入しておく（あとで2グループにわけするため）。
- ・前もって資料1「くるくる棒」・資料2「きらきらペットボトル」を参考にして、チラシでくるくる棒を2～3本、きらきらペットボトルを1つ見本としてつくっておく。
- ・持参してもらった物（はさみ・ペットボトルなど）を持って、丸くなって座る。

1 受け入れと自己紹介 10分

- ・用意していた材料もまん中に置いておく。
- ・並べる たたく ころがす 積む なめる 持って走る つなぐなど、遊ぶ様子を見守る。



さっそく遊んでくれていますね。〇〇です。みなさんとの出会いを楽しみに来ました。みなさんは、日々、お子さんから目を離さないように奮闘されていることと思います。今日は、少しの時間、ご自分のお子さんから気持ちを離してみるひとときをつくりたいと思います。授乳や水分補給は自由にしてくださいね。

2 みんなでこんにちは 15分

- ・チラシでつくったくるくる棒2～3本を見せる。



これはチラシを折って、くるくる丸め、端をセロテープで止めています。空の牛乳パックやペットボトルに入れたり出したりして遊びます。みなさんも1本つくってみましょうか。



まだ途中だと思いますが、また続きをしてもらう時間もありますので、少し手を止めてこちらを見ていただけますか。

ペットボトルのラベルをはがしてみますね。これはシャカシャカして、このラベルだけでも子どもは遊んでくれます。ハンカチに包んで赤ちゃんのおもちゃにしてもいいかなと思います。このラベルは水に強いので、今日はこれを細く切って、きらきらペットボトルをつくりたいと思います。これができあがりなんです。

- ・見本のきらきらペットボトルを見せる。

3 手づくりおもちゃづくり／交替で見守り参加 40分

- ・資料2を配布する。



今からお配りする資料は、交替でみなさんにつくっていただく、きらきらペットボトルの手順です。資料の上の角に記入している○△はつくる人と子どもを見守る人のグループです。

○と書いてある方？△と書いてある方？（手を上げてもらう）ありがとうございます。資料は目を通していただきましたらカバンの中に入れておいてください。

○グループはきらきらペットボトルをつくります。△グループは自分の子どもと一緒に○グループの子どもを見守ってください。

※部屋の広さにもよるが、子どもたちが遊ぶ横でおとなが作業をする。子どもはすんなりと離れなくて当たり前だという気持ちや、みんなで子どもに危険なことがないか見守ってほしいと伝える。きらきらペットボトルをつくる時も、子どもを見守り保育する時も、隣の方とおしゃべりし、気軽に楽しむ。

ワンポイントアドバイス

水は両グループがペットボトルを切り終えてから最後に入れる。または、帰ってから入れる。

- ・○グループと、△グループを交替する。

4 片付けとふり返し 20分

- ・使った材料などを片付ける。
- ・持って帰りたい物を持って、丸くなって座る。



みんな一緒のおみやげができました。他のお子さんに直接関わることはなかった方もいらっしゃると思いますが、いろいろな遊び方や過ごし方があるのだと感じられたのではないのでしょうか。他のおとなに抱かれたり、自分から少し離れて遊んでいる子どもを見て、何か感じるころがあったかもしれませんね。今日は、初対面にもかかわらず、なごやかな雰囲気でご過ごせました。おとなが笑顔でおしゃべりしていると、子どもが安心するのを感じます。人とのつながりが遊びの原点ですね。今日はありがとうございました。

※人数や場の雰囲気で数人の方に感想を言ってもらったり、おもちゃをつくっている時などに感想を拾い、了解を得た上で紹介してもよい。

資料 1 くるくる棒（ファシリテーター用資料）

出したり 入れたり

- ・ ペットボトル
- ・ チラシ
- ・ ビニールテープ



チラシをまいて、ビニールテープでとめて、ペットボトルにポットン！



つついとお口に入っちゃう。

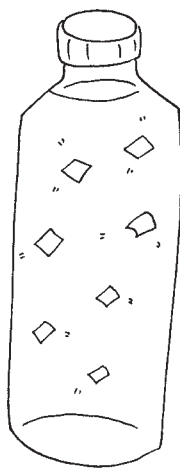


きらきら ペットボトル

- ・ ペットボトル
- ・ ペットボトルのラベルフィルム
- ・ はさみ
- ・ 切ったものを受ける容器



- ① ペットボトルに巻いているラベルフィルムをはずし、はさみでチョキチョキ細かくして容器に集めます。
(容器は発泡トレイだと静電気がおきて不向きです)



- ② 水と一緒に入るとキラキラ！
思わず見入ってしまうきらきら
ペットボトルの完成。



ペットボトルはからっぽでもあそべるね。

キャップを開け閉めしたり、ストローやスポンジを切って入れたり



ラベルフィルムもそのままでもあそべるね

はがすのがおもしろいし、さわってみたら不思議な音。ということは、きらきらペットボトルは作る前にあそべて、作りながらもあそべて、作ってからもあそべる？！ すぐれものですね。

保護者向けプログラム

- ① 子どもの声を聴く
- ② 子育て、楽しいですか？
わたしも大切、子どもも大切
- ③ 子育てしやすい社会って?!

- ・  ファシリテーターが話す内容を示しています。
- ・ ※ ファシリテーターが進める際のポイントを示しています。

▶ 「おとな自身」を見直す

「子どもを尊敬の対象として」とは言うものの…

本書の冒頭で、「子どもの人権を守る」ためには、「子どもを尊敬の対象としてとらえる子ども観」がポイントになると述べました。このことをもう少し具体的に考えてみましょう。

「子どもを尊敬の対象としてとらえる子ども観」のありようについては、p53のコラム「子どもを尊敬するってどんなこと？」で考察しているので、そちらを参照していただければと思います。ただし、子育ては「自分とわが子」の関係だけで行われていることではありません。子育ては、さまざまな人との関係の中で行われている営みであり、その関係のありようによって、子どもへの関わり方が左右されてしまうこともあります。親自身が「赤ちゃんが自分の思いを泣いて表現することは大切だ」と考えていても、公共の空間の中で赤ちゃんが泣きだし、周囲からの冷たい視線や舌打ちが聞こえてくると、赤ちゃんの「泣く」という表現がとてもとましくなる、ということなどは、この一例であると思います。こうしたことは、子どもを尊敬する立場に立った子ども観が「その場の中では共有されていない」ことから起こることだと言えます。

おとな集団の価値観の共有がカギ

少なくとも、保育所・幼稚園などの保護者集団や、地域の中での子育てコミュニティの中では、「子どもを尊敬の対象としてとらえる」価値観が共有されていることが必要ではないでしょうか？ そのためにも、おとな同士が思いを出し合うことを通じて、子どもの人権の立場に立った価値観を共有していくプロセスが大切になると思われます。本書の中の活動などを通して、おとな同士の中にある価値観を見直す機会を持つてみることで、変化のきっかけになるかもしれません。



子どもの声を聴く

キーワード 自己肯定、自他尊重、子どもの人権

ね ら い

- ・「聴く」「聴いてもらう」体験から、自分の気持ちを感じる。
- ・役割を演じることで、子どもの気持ちやおとなの気持ちを考える。
- ・子どもの権利条約を知り、子ども自身の感じる力に気づく。



準備するもの



所要時間

90分

「参加」「守秘」「尊重」「時間」を板書、またはカードをはる。

A4白紙：人数分（テーブルに置いておく）

資料1・2・3・4：人数分

振り返りシート（A4白紙半分サイズ）：人数分

プログラムのおおまかな流れ

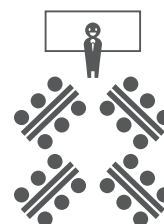
- | | | |
|------------|----------------|---------------|
| 5分 | 1. 趣旨とルールの説明 | ● 約束の共有 |
| 10分 | 2. 自己紹介と導入 | ● 自分の気持ちを知る |
| 30分 | 3. 聴き合う | ● 自分の気持ちを伝える |
| 30分 | 4. ロールプレイから考える | ● 人の気持ちを感じる |
| 15分 | 5. まとめ | ● 子どもの権利条約を知る |

手 順

はじめに

- ・会場は最初からグループ別に机とイスを並べておく。
- ・来た人から順にグループに分かれて座ってもらう。
1 グループは、4～6人ぐらい。グループ分けをする際、親しい人同士のグループにならないように声かけをする。

[机とイスの配置例]



1 趣旨とルールの説明 5分



こんにちは。時間になりましたので始めます。〇〇です。よろしくお願いします。
みなさんは、テーマ「子どもの声を聴く」に、どのようなイメージをお持ちでしょうか。今日、この場で出会うみなさんと話し、聴き合い、感じ合っていきたいと思っています。最初に、約束をさせてください。

「参加」「守秘」「尊重」「時間」を説明する。

「参加」できるだけ話し合いの場に参加してほしいですが、場合によってはパスしても大丈夫です。

「守秘」ここで話された個人の話は、ここだけにして、決して外に持ち出さないでください。

「尊重」それぞれの意見や考えは尊重し、相手の話や意見を否定せず、お互いを尊重しましょう。

「時間」一人の方だけが話し過ぎることのないように、みんなで時間を大切に使いましょう。

2 自己紹介と導入 10分

- ・ A 4 白紙を縦横に折り目を付け①②③④と番号を記入して、①に名前を書く。

【白紙の例】

①名前	③
②参加度	④

- ・ ②に今日の参加度（参加意欲）を 0 から10までの数字で記入する。
- ・ ①②で自己紹介をする。



②の参加度は、今日の会をとっても楽しみに来ました！という方は10で、体調がすぐれないなど、マイナスの要因によって0に近くなります。みなさんが記入されたら、お一人1分目安で、どなたからでも結構ですので、名前と参加度の理由を話し、グループで聴き合ってください。

3 聴き合う 30分

- ・ 2～3分時間をとって、③最近ハマっていること好きなこと、④最近ちょっと困っていることを記入する。

※③④を聴き合う時は、同じ相手とする。

ワンポイントアドバイス
近くの人と2人組になり、イスの向きを変えて聴きあう姿勢をつくる。

【1分×2回】

【2分×2回】

※聴く人は話題を取ったり、質問などは控え、「聴く」ことに徹します。話す人は持ち時間は全部自分のことを話す時間ととらえて自由に話す。

- ・グループでふり返る。

[8分]

聴いてどうだったか聴いてもらってどうだったか、気づいたことなどを出し合う。

- ・どのような気づきがあったか、グループでまとめて順に発表し合う。
- ・参加者全員でグループの気づきを共有する。

※グループでまとめられたどの気づきも大切にしたい気持ちを伝える。少数の気づきは特に取り上げる。

4 ロールプレイから考える 30分

- ・各テーブルに、資料1 ロールプレイ「おもちゃのとりあい」シートを人数分配る。
- ・グループで役を決める。5人目6人目の人は第三者の役になる。
- ・読んで演じ、その後、それぞれに感じたことを出し合う。
- ・グループ内で役割を変えて演じ、保護者の言葉を考える。
- ・グループごとに、新しいセリフでのおもちゃの取り合い場面を演じ、順に発表し合う。
- ・参加者全員でグループの発表を共有する。

[8分]

[8分]

※グループで考えられた気づきや発表を大切にしたい気持ちを伝える。正反対の気づきは両方取り上げる。

5 まとめ 15分

- ・資料3・4、振り返りシートを配布する。

今日はみなさんの中に色々な気持ちがおこったと思います。

そして、それを伝えあう体験をしていただきました。



人が生きる上で、自分の思っていることを伝えられること、それをきちんと受け止めてもらえることは大切な権利です。また、これはおとなと同じように子どもにもある権利です。

みなさんは、日本も批准している子どもの権利条約という国際条約を知っていますか？

子どもが幸せに成長するために必要な「基本的人権」の世界基準とされています。そこにも自分の意見を伝え、聴いてもらうことが権利の1つとして書かれています。子どもは、生まれた時からこの条約で示された権利を持っています。赤ちゃんも言葉で伝えられないだけで、表情や声など身体全部を使って気持ちを伝えてくれているのです。

子どもの権利条約を乳幼児期の子どもにあてはめてみたのが資料4です。

人は自分の表現した事をきちんと聴いて、受け止めてもらえることによって自分自身への信頼感が育ちます。また、どんな年齢であれ、1人の権利の主体として大切にされることで自尊心が育ちます。

この資料を目に付くところに貼っていただいて、今日、みなさんと考えたことを時々思い出していただけたらうれしいです。振り返りシートには、今日の感想をどんなことでも自由にご記入下さい。

資料 1 ロールプレイ「おもちゃのとりあい」シート

【資料】 ロールプレイ「おもちゃのとりあい」シート

役割

・子ども A・子ども B・保護者 A・保護者 B

場面設定

子ども A：おもちゃで遊んでいる

子ども B：おもちゃをとりあげる

子ども A：泣く

保護者 B：「何やってるん！取ったらあかんでしょ！ 返さない！すいません」
と言って子ども Aにおもちゃを渡す

子ども B：泣く

保護者 A：「いいよ、いいよ！ Aはこのおもちゃで遊ぶから」と言って
Aからおもちゃをとりあげて Bに渡す。

子ども A：泣く

キ リ ト リ

資料 2 エッセイ：おもちゃのとりあい

エッセイ：おもちゃのとりあい

おもちゃのとりあいって、いろんな場面があってドキドキします。子どもだけの場面でとりあっていたら、それぞれの気持ちを大切に聴いていくだけで、子どもどうして解決していくような気がします。それなのに、おとながそばにいとついで、子どもに「使いたいのか？」とか「あとで貸してもらおうか」とか言ってしまいます。どちら側に寄り添うこともできず、実況中継風に気持ちを代弁しながら、傷つけあうことを避けようと間に入ったりします。そんなとき、子どもたちは、自分の気持ちとは違うところで納得させられているのかもしれませんが。そのことにかかわったおとなも、アドバイスされた子どもも、気持ちにフィットしないことが多いようで、知らない間に気持ちを傷つけてしまう場合もあります。ほんとうは、おとなも子どももそんな気持ちを聴きあう場であつたらと思います。おもちゃのとりあい＝大変！というよりも、そこで感じた気持ちを大切にすることで、なんだかうまくつながっていけるような気がしています。

出典：『子育て温泉～新しい子育て・子育て支援』（社）子ども情報研究センター 双葉堂 2011年

♪子どもの権利条約ってなに？

この世に生まれたすべての子どもが、幸せに成長するようにそのために 必要な「基本的な人権」の世界基準を決めた国際条約です。

1989年国連で全会一致で採択されました。

日本は1994年に批准（守ると約束）されました。

世界には大きな戦争をしたり、あちこちで民族間の争いや内戦があり、多くの子どもたちが

- *家や家族を亡くして、路上で暮らしたり

- *兵隊に使われたり

- *学校に行けなかったり

- *売られたり

- *奴隷のように働かされたり

- *性産業で、買春に利用されたり

おとなの都合で、子どもの権利が侵害させることが、あちこちで起こっていました。

それで、これではいけないと世界中から国連に集まった人が10年かけて考えに考えてつくった条約です。

子どもの権利は、親・国・地域・おとなが守ります。

出典：（社）子ども情報研究センター保育部 ももぐみだより 2012年

「児童の権利に関する条約」（子どもの権利条約）本則

第6条 生きる権利・育つ権利

すべての子どもには、命が大切にされ、健やかに育つ権利があります。

その権利を守るために、国はできる限りのことをしなければなりません。

第7条 名前・国籍を持つ権利

すべての子どもは、名前や国籍を持ち、親を知り、親に育ててもらふ権利があります。

第12条 意見を表す権利

子どもは自由に自分の意見を表す権利や聴いてもらう権利を持っています。

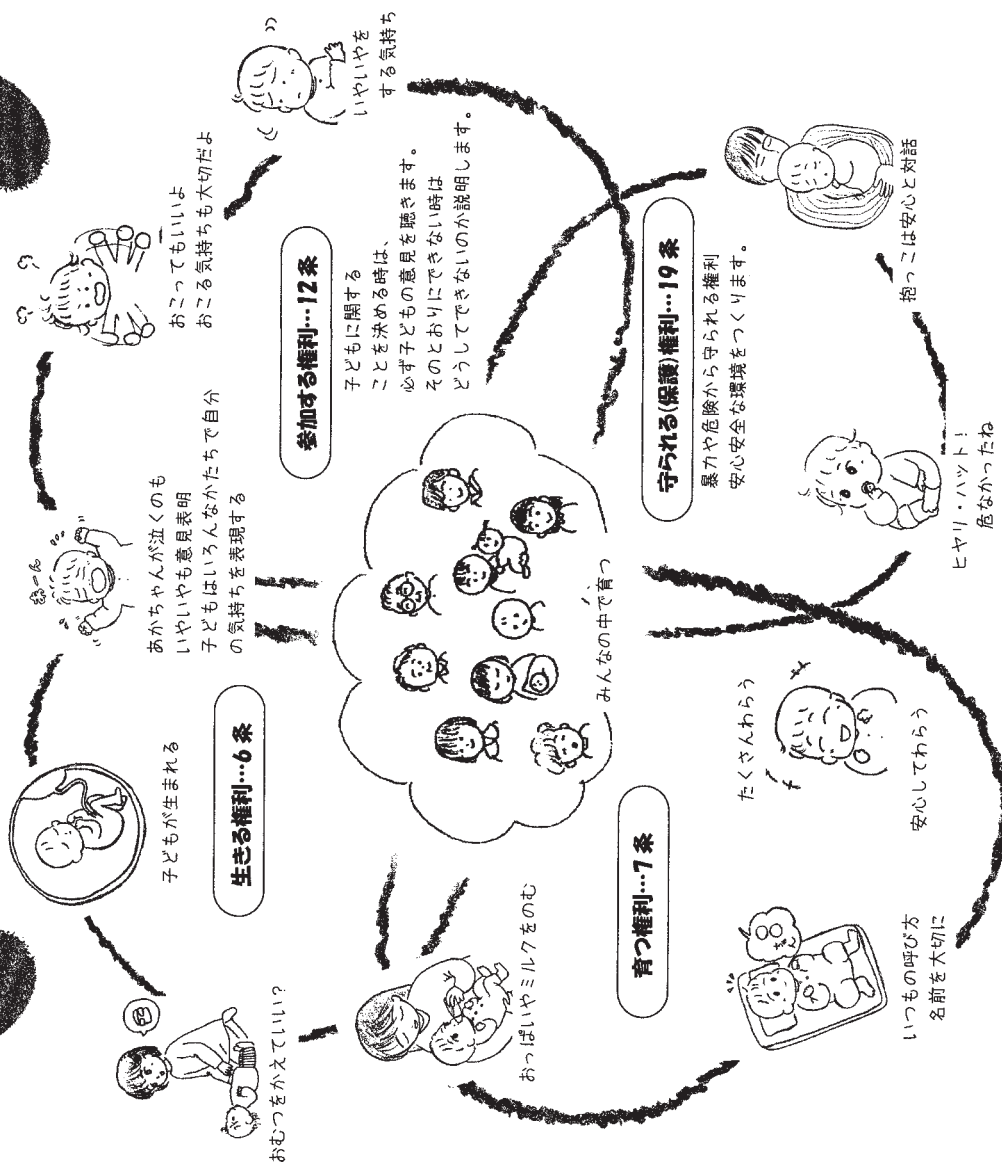
第19条 虐待からの保護

子どもが暴力をふるわれたり、適切な扱いを受けられなかったりしないように、国は、子どもを守らなければなりません。

出典：人権学習シリーズVol. 9 『あたりまえの根っこ』 大阪府府民文化部人権室

子どもが主役♪ 困ったらかちゃんに 聴こう♪

子どもの権利条約乳幼児期編



子育て、楽しいですか？ わたしも大切、子どもも大切

キーワード エンパワメント、自己尊重、自己肯定

ね ら い

- ・ともすれば自信を失い、しんどさを感じがちな子育て中の親が、自分自身を肯定できるようになる（エンパワメント）。
- ・「親としての自分」だけでなく、1人の大切な個人としての自分を確認する。



準備するもの

A 4白紙・資料：人数分
多色マーカー（裏うつりしないもの）：人数分



所要時間

60分

A 3白紙：グループ数分
名札：人数分 机：数台

プログラムのおおまかな流れ

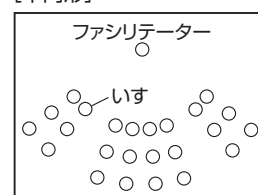
- 15分** 1. わたしの子育て天気予報……………●ウォーミングアップ
- 30分** 2. 理想の子育て？ 楽しい子育て？……………●イメージの共有
- 15分** 3. わたしも子どもも大切にするために……………●自己肯定とエンパワメント

手 順

はじめに

- ・会場は、イスのみで半円形など、リラックスして話し合いやすい形に設営しておく。
- ・用意した名札にニックネームなど、その場で使いたい名前を自分で書いてもらう。

[半円形]



1 わたしの子育て天気予報 15分

- ・自分の子育ての状況を天気予報に見立てて、言葉でも絵でも自由にA4の紙にマーカーで書いてもらう。
例)「くもりときどき晴れ、です。大変ですけど、子どもの笑顔に幸せを感じます」
「台風接近中、週末に実家に行く予定なんです、おばあちゃんがうるさくて…」
「カンカン照り、もう熱中症で倒れそうです。子どもの元気がありあまって」
- ・近くの人と4人程度のグループになり、5分程度時間をとって、お互いに紹介する。
- ・時間がきたことを告げ、感想をそれぞれで共有する。

ワンポイントアドバイス

グループ分けの方法

ふだんから知り合いの人と同じグループだとかえって話しにくいこともある。知り合い同士で近くに座っている人を別のグループにするには、作りたいグループの数を計算して、順に数字を言ってもらい、同じ数字の人で集まるとよい(たとえば23人だと、4~5人で5グループになるので、「1」「2」「3」「4」「5」「1」「2」…と順に数字を言ってもらおう)。ほかに、アメを数種類用意しておいて、くじ引きの要領で同じ味の人で集まる、という方法もリラックスできる方法。



やってみて気づいたこと、感じたことはありますか？

プライバシーに差し支えない範囲で、全体に共有したい“天気予報”はありましたか？

2 理想の子育て？ 楽しい子育て？ 30分

- ・机を出してグループごとに座る。
- ・A3白紙を1枚ずつ配る。紙を二つに折り、「いいお母さん(お父さん・親)」のイメージを出し合い、左半分に書いていく。キーワードの箇条書きやイラストなどでもよい。

【5~6分】

- ・次に、「しあわせなお母さん(お父さん・親)」のイメージを出し合い、紙の右半分に書いていく。

【5~6分】

- ・両方書いてみて、気づいたこと・感じたことを話し合う。話し合ったことを参加者全員で共有する。



やってみて気づいたこと、感じたことを発表していただけますか？

日ごろ、みなさんはどんな親になりたいと思っていますか？ どちらのイメージに近づきたいですか？

子どもにとっては、それぞれの親はどんなふうに感じられるでしょう？ 子どもには“いい子”になってほしいですか？ “しあわせな子”になってほしいですか？ いい親であろうとすることがプレッシャーになってしまい、子育てがしんどくなることもあるのではないのでしょうか。

親が楽しくしあわせであることが、子どもも楽しくしあわせに育つことにつながるのではないのでしょうか。

参考

※「しあわせなお母さん(お父さん・親)」という表現は、『おかあさんがもっと自分を好きになる本ー子育てがラクになる自己尊重トレーニング』(北村年子著)学陽書房 2006年を参考にした。

3 わたしも子どもも大切にするために 15分

- ・資料「わたしの権利 ぼくの権利」を配る。ファシリテーターが読み上げるか、参加者に1項目ずつ読んでもらう。



“権利”という言葉は、難しく感じるかもしれませんが、このワークシートの10項目は、本当にみなさん自身が持っている“権利”です。子育てをする親がこうした権利がある、と感ずることができていると、きっと“しあわせな親”として子どもに向き合うことができるのではないのでしょうか？

- ・今の自分にとって一番大切にしたい権利を選ぶ。グループでそれぞれが選んだものと理由を簡単に共有する。
- ・グループのメンバーから、「〇〇さん、あなたには～～の権利があります」と目を見て言ってもらふ。順に、全員に言ってもらふ。



いかがでしたか。声に出して誰かに言ってもらふと、文字を読むだけより迫ってくるものがあるかもしれません。

まずは、日ごろがんばっている自分自身にこうした権利があることを何度でも確かめてください。そうすることが、子どもの権利を大切にしたい関わりにもつながっていくことと思います

ワンポイントアドバイス

さらに時間があれば、付け加えたい「権利」を考えて発表するのもよい。



わたしの権利 ぼくの権利

1. わたしには、対等な人間として、尊厳をもってあつかわれる権利がある。
あなたはこの世にたったひとつの、かけがえのない、たいせつないのちだってこと。誰も、あなたの心やからだをきずつけたり、いじめたり、差別してはいけないってこと。
2. わたしには、自分の感情と意見を持ち、それをあらわす権利がある。[自己表明権]
自分の感じたこと、思ったことを、自由に、人にいったり発表していいってこと。自分の気持ちをたいせつにして、泣いていい、怒っていい、笑っていい、ありのままのあなたでいていいってこと。
3. わたしには、自分の価値を尊重される権利があり、自分の価値観に耳をかたむけてもらい、まじめにとりあげてもらおう権利がある。[自己尊重権]
誰がなんといおうと、あなたは価値ある存在だってこと。イイ子でなくても、優等生でなくても、生きているだけですばらしい、たいせつな存在だってこと。そしてほかの人からも、あなたの価値をみとめてもらい、たいせつにあつかわれ、安心して生きるけんりがあるってこと。
4. わたしには、自分にとって大切なものを、自分で決める権利がある。[自己決定権]
やりたいか、やりたくないか、ほかの人からきょうせいされずに、「イエス」「ノー」を自分できめていいってこと。自分の人生を、自分でえらんで生きていいってこと。
5. わたしには、まちがいをする権利がある。
けっして「完ぺき」でなくていい、「不完全」でもいいってこと。まちがえても、しっばいしてもいい、なんどでもやりなおすけんりがあるってこと。
6. わたしには、考えを変える権利がある。
いままでとちがった考え方や生き方をしてもいいってこと。あたらしい自分にかわってもいいってこと。
7. わたしには「わかりません」「できません」という権利がある。
わからないことがあっても、わかったふりをしなくていいってこと。できないことは、むりにしなくてもことわっていいってこと。
8. わたしには、ほかの人の悩みの種を自分の責任にされることをことわる権利がある。
あなたのせいでおこったわけではないもんだいを「おまえのせいで…」「あんたがいるから…」ってひなんされたり文句をいわれても、自分が悪いと思わなくていいってこと。その人のくるしみやかなしみは、その人じしんのもんだい。あなたが自分をせめなくていいってこと。
9. わたしには、自分にとって必要な休息や遊びの時間、自由な時間をもつ権利がある。
つかれたときには休んでいい、ボーッとしたり、好きなことして遊んだり、自分のための時間を楽しんでいいってこと。そしてほんとうにしんどいときは、むりしないで、何もしなくてもいいってこと。
10. わたしには、自分の権利を、行使する自由と行使しない自由がある。
自分のいいたいこと、やりたいことを、いつ、どこで、どんなふうに行うするかしないか、自分でえらんで決めていいってこと。実行しなくても、あなたのけんりはけっしてなくなるってこと。

出典：『おかあさんがもっと自分を好きになる本ー子育てがラクになる自己尊重トレーニング』北村年子 著 学陽書房 2006年

子育てしやすい社会って?!

キーワード 子育ての社会化、抑圧の内面化、個人的なことは政治的なこと

ね ら い

- ・社会にある「母親像」「父親像」を問い直し、「親ならこれくらいするべき」「できて当たり前」と自分自身を無意識にしばっている価値観に気づく。
- ・よりよい形で子どもに向き合うためにも、親だけが子育てを抱え込まず、子育てしやすい社会にしていけるために大切なことを考える。



準備するもの



所要時間

60分

A 4白紙・資料：人数分

多色マーカー（裏うつりしないもの）：人数分

A 3白紙：グループ数分

名札：人数分

プログラムのおおまかな流れ

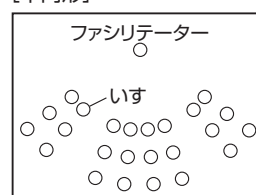
- | | | |
|------------|---------------------------|----------------|
| 10分 | 1. ○○手渡しゲーム…………… | ●ウォーミングアップ |
| 20分 | 2. 子育てあるある！…………… | ●価値観・思いのわかしあい |
| 30分 | 3. 親であることのプレッシャーをはねのけよう！… | ●あらたな「子育て」観づくり |

手 順

はじめに

- ・会場は、イスのみで円形に設営しておく。荷物は空いている机におくなど、動きやすい状態で着席してもらう。
- ・用意した名札にニックネームなど、その場で使いたい名前を自分で書いてもらう。

[半円形]



1 ○○手渡しゲーム 10分

- ・参加者の輪の中心にファシリテーターが入る。ファシリテーターがボールを持っているふりをする。



ウォーミングアップにちょっとゲームをしたいと思います。ここにボールがあります（直径20～30センチくらいのボールを持っているジェスチャー）。みなさん、見えますよね？ では、これからこのボールをお渡ししたいと思います。

- ・立ちあがり、参加者の一人に（見えない）「ボール」を手渡す。受け取った人は席を立ち、次に渡す人のところへ行き、渡した人は空いた席に座る。繰り返していく。



○○さん、立ちあがってボールを受けとってください。では、誰でもいいので次の方にボールを渡しに行ってください。

ボールがスイカに変わりました！ スイカらしく持って、受け渡ししてくださいね。
スイカからブドウに変わりました！

- ・タイミングを見て、「ボール」を「スイカ」「ブドウ」「生まれたての赤ちゃん」「時価1000万円の花瓶」と変えていく。
- ・最後に「時限爆弾になりました！」と言い、カウントダウンして終わる。最後の人とファシリテーターが交替して座る。



時限爆弾になってしまいました！ 爆発まで、10、9、8、…3、2、1、ゼロ！
では、このゲームを終わります。ありがとうございました。

2 子育てあるある！ 20分

- ・今日の話し合いのルールとして「協力・尊重・守秘」を板書し、確認する。



「協力」とは、お互いに学ぶために協力しましょう、ということ。「尊重」とは、それぞれのあり方や意見・思いを尊重しましょう、ということ。「守秘」とは、ここで出された個人の経験や考えはこの場にとどめる（外に持ち出さない）、ということです。

- ・4～5人のグループをつくり（P77のワンポイントアドバイス参照）、グループごとに机を出して座ってもらう。
- ・1人ずつにA4の紙を1枚、マーカーを1本配る。2つに折り、左半分に「BEFORE（前でもよい）」＝子育てする前に思っていたこと、右半分に「AFTER（後でもよい）」＝実際に子育てしてみてびっくりしたことを書いてもらう。その紙を使って自己紹介をする。

【5分程度】

- ・グループにA3の紙を配る。子育てをされていてまわりからかけられた言葉で印象に残っているものを出し合い、A3の紙に書いていく。ある程度書き出したら、「言われてうれしかった言葉」「言われて腹が立った・落ち込んだ言葉」を色分けしてみる。

【10分程度】

ワンポイントアドバイス

※はじめから紙を2枚配り、「うれしかった言葉」と「腹が立った言葉」を別々に書いてもよい

- ・各グループから出たものを発表してもらい、全体で共有する（時間があれば全部、なければ特に盛り上がったものを1つか2つの発表でよい）。



どんなことを言われたでしょうか？

とくに「腹が立った言葉」は、言われたときに、どのように対応しましたか？ 言われたことは、腹が立ったけど無視して気にしてないですか？ それとも気になって、言われないようにしようとしていますか？

3 親であることのプレッシャーをはねのけよう！ 30分

- ・資料1-①「叱られやすさ」資料1-②「男の涙」を配り、読んでもらい、気づいたことをグループで話し合う。

[7～8分]

ワンポイントアドバイス

参加者が女性の場合は、「叱られやすさ」だけでもよい。

- ・社会の中のジェンダー意識（あるべき女性／男性についての価値観）を背景に、女性の場合は母親として子育てをして当たり前とされがちなこと、男性の場合はストレスやぐちを出し合う関係が少なくなりがちなこと、あるべき「母親像」「父親像」に縛られて、しんどさを抱え込んでしまったり、母親と父親がお互いに不満を抱いてしまったりしがちなことを説明する。

[3～4分]



女性は、出産をすれば自然と子育てできるように思われていますが、自然とできるようになるわけではありません。また、自分を犠牲（後回し）にしても子どもを優先するのが母の愛、子どもをすべて理解し守るべきであって何かあったら母親の責任、といったイメージもあります。一方で、父親のイメージは、妻や子を養うために仕事が優先、いざというときに子どもに向き合い導く、といったものでしょうか。こうしたイメージのために、子どもがトラブルに巻き込まれたり、けがや病気になったりすると母親が責められ、父親が子どもと日常的に関わり、ストレスを感じることもあっても話す相手がいない、ということが起こります。みなさんが感じたことのあるしんどさも、“女らしさ・母親らしさ” “男らしさ・父親らしさ” のイメージと関係あるかもしれません。

- ・資料2「子育て事情 いま・むかし」を配り、実は昔はコミュニティで子育てがされており、親だけが子育ての責任を担うようになったのは近代のことであることを伝える。

[3～4分]



子育てについて、“これが自然、伝統”や“こうあるべき”と思っているものは、明治以降の社会の変化の中で生まれたもの、戦後になって広がったものが、実はたくさんあります。もし、子育てについてのイメージが実際の子育てをしんどくさせているなら、イメージそのものをもっと肯定的で元気が出るようなものに変えていってもよいのではないのでしょうか？

- ・「子育てあるある！」で共有された「腹が立った・落ち込んだ」言葉に対し、自分の心の中での反論・傷ついた自分を励ますメッセージをグループで考える。全体で共有する。

[15分]



今の社会やライフスタイルに合った、親も子どもも大切にされるような新たな子育ての考え方・イメージを、みんなでつくっていきましょう！

叱られやすさ

私は病院が大嫌い。厳密に言うと、“子どもを病院に連れて行く”のが嫌いなのだ。特に待合室が嫌だ。以前、子どものやけどで病院通いをしていたとき、いろんな人に怒られたから。子どもの手に巻かれた包帯を見ながら「どうしたの？」って心配そうに聞かれて、「お湯でやけどしたんです」と正直に答えたら、「母親が注意しないと」と何度も言われた。このやけどって私は一緒にいなかったんですけど、とは言いつつがましくて言えなかった。

ところが、夫が連れていくときには、子どもの世話をするやさしいお父さんとして、称賛されたり親切にされたりする。私が誰にも褒めてもらえない上に、親としての至らなさを注意される場面でだ。

お産の前に、出産予定の産院で「会陰切開をしたくない、母子同室にしてほしい」など自分の要望をお医者さんに伝えなくてはいけなかった。その時に、友人や助産婦さんにアドバイスされたのが、夫と一緒に連れていった方がいいということ。男性がその場にいるだけで、お医者さんは（しかったりせず）丁寧に対応してくれるというのだ。

つい最近雑誌で読んだのが、日本語が乱れているという話。「トロトロすんなよなー」とか「うちのババァが…」とか、若い女性が使っている。女子高校生だったり、子育て中の母親だったり。を例にあげて嘆いているコラムだ。読み終わって「へ？」だった。確かにきれいな言葉じゃない。だけど、どうして女性だけを問題にするのだろうか。男性ならどんなに日本語を乱しても許されるだろうか。

とにかく女性はしかりやすいらしい。女性差別なんて言葉を使うと「考えすぎだ、差別なんかしていない！」とまたしかられたりする。でも、女性だけに特定の役割（育児を完璧にこなす、自己主張しない、美しい日本語を話すなど）を押しつけるなんてやっぱり差別なのだ。

社会は女性だけをしかることで、いろんな矛盾を支えている。売春する女性は売春防止法で捕まるけど、買春する男性は野放し、セクシュアル・ハラスメントの被害者が、被害者なのに職場を去らなければならなくなる。結婚しても改姓したくない男性は支持され、改姓したくないと主張する女性は攻撃される。

「しかられる」なんて個人的なことが、実は女性であるが故だったりするのだ。そのからくり。に気づくと、急に楽になる。気づくことは自分を救うし、社会を変える第一歩になるのだ。

(糸)

男の涙

「げー、きたない」と大声で怒鳴った。「なんで、こんなする」と言いながら強くたたいた。初めて強くたたいた。一歳半になったばかりの子が大声で泣いた。

足にまとわりつく子どもをうとうとうしく思いながら、台所で食器を洗っていたそのとき、当の子どもは「うんち」のついた自分のオシメを手にし、中身をこぼしていたのだ。

僕自身意外だった。あんなに激しく怒ってしまうとは。いままで思ってもみなかった。ブレーキが効かない。以前本で読んだ「母親の育児ノイローゼ」が僕にも起こったのだ。

妻が出張で四日間家を空けることになった。僕は大きな問題もなく、この四日間をやりすごせると思っていた。だから、親の助けも求めずに頑張るつもりだった。その妻のいない二日目の出来事だった。「家事も育児も完璧に」なんて、できるはずもないのに、どこかで気負っていたようだ。

牛乳をこぼし、トイレの前でおしっこをもらした。お母さんがいないことで子どもなりに不安もあったはず。でも僕としても家事をしながら、こんなことが続くと大変だった。そしてあんなふうに怒ってしまったのだ。

泣き叫ぶ子どもに「ごめんね、痛かったね」と言って腕をさすってあげた。しばらく泣くと子どもはいつものように元気に遊び出した。僕には罪悪感が残った。

やるせない。この気持ちを誰かに伝えたい。ワープロに向かい必死になって、今の気持ちをつづった。一方的でいい、相手から「こういうときはこうしたほうがいい」なんてアドバイスはいらないから。キーボードを打ちながら、涙がポロポロと流れた。

不思議だった。文章を書き終えたころには、涙も止まり気分もスッキリしていた。

「泣くな、我慢しろ」という社会のメッセージが、つらさを蓄積させる。「泣くこと」が、つらいときの特効薬になるというのに。

翌日はくしくも母の日。日曜日にこのまま家にいてもつらくなるので、友人の家に子連れで押しかけた。

男は感情表現が苦手だが、それは幼児期からそうなるように育てられるから。そう言えば自殺率って男の方が高いけど、弱音が吐けないせい？ 人は親身になって話を聞いてもらえるだけで、心安らぐものである。

僕は冗談や強がりじゃなく、自分の感じていることを話した。お陰で自分を取り戻すことができた。

明日、妻が帰ってくる。もう少しの辛抱だ。

(新)

子育て事情 いま・むかし

〔江戸時代の子育て〕

- ・ 武士の家では跡目相続という考え方のために、男の子を育てるのは父親の役割。文武のほか、日常の礼儀作法や言葉づかいなどをこまかく教えるものとされていた。
- ・ いまでいう「育児書」にあたる書物も、父親向け。幼いころの関わり方から、40歳をすぎて家をゆずって後見人になるまで、「父たるの道」が書かれた書物がいろいろと発行されていた。
- ・ 庶民の間では、「村の子ども」つまり共同体の子どもとしての視点が強くあった。1つの家族、ひとり／ひと組の親によってのみ育てられるのではなく、ネットワークの中で子どもは育っていった。
- ・ 象徴的なのが、さまざまな「仮親（擬制的親子関係）」。

とり あげ おや さん ば
取 上 親（産婆とはべつに、出産時にへその緒を切る人）

抱 き 親（出産直後に赤ちゃんを抱く人）

行き会い親（赤ちゃんを抱いて家の外に出て最初に出会う人）

ち おや
乳 親（生後数日間、乳を与えた女性）

拾 い 親（丈夫な子どものいる家の前に形式的に捨てた赤ちゃんを、一時的に拾って預かった人）

名 付 け 親（名前をつけた人。たいていは自分の名前から一字あるいは複数の字を与えた）

もり おや
守 親（幼児になるまで子守をした人）

え ば し おや
烏 帽 子 親（武家の元服に立ち会う）

それぞれの仮親の役割は一時的なものだが、子どもと仮親とのつきあいは一生続いたとも言われる。

- ★「男性による子育て」「血縁にないもの（社会のネットワーク）による子育て」が現代よりもさかんだったともいえる。

〔いまの子育てへの流れ〕

- ・ 明治にはいり、社会のさまざまな分野で価値観が変化する中で、女性の生き方として「良妻賢母」が提唱されるようになった。良妻賢母の考え方は、家庭内での役割というよりは、家事や育児、（職業や兵役についた）夫への内助をとおして、女性が国の役に立つための思想として登場した。
- ・ 大正時代には「赤ん坊展覧会」という、“子育てコンクール”も行われ、『我が子の教育』（鳩山春子著）がベストセラーになるなど、母親の教育熱が高まった。
- ・ 「母性」「母性愛」という言葉／概念が登場したのも大正時代。もともとは「生まれながらに持っている」「本能」などと結びつけられた意味はなかったのに、いつのまにか母子の愛は特別で崇高なものというイメージが強調されていった。
- ・ 長い間、子どもは「授かりもの」ととらえられていたが、戦後のベビーブームを経て（人数やタイミングを考えて）「つくるもの」となり、子育てをとおして母親として自己実現をめざすことが、女性の生き方として一般的になっていく。
- ・ 1960年代に「三歳児神話」（3歳までの乳幼児期に母親による濃密な接触と教育が重要、という説。海外での研究理論が偏った形で紹介されたもので、日本に固有）が広がる。「子育ての中心は母親であり、とくに3歳までは母親が子どもにかかりきりで育てるべき」という考え方は、現在の祖父母～子育て中のほぼ3世代にみられるもので、伝統的なものではない。1998年（平成10年）版の「厚生白書」で「合理的根拠はない」と明確に否定されたが、いまでも影響は大きく、子育て中の（とくに母親への）プレッシャーとなっている。

『NHKテレビテキスト 歴史は眠らない ニッポン母の肖像』（香山リカ）日本放送出版協会（2010年）などを参考に作成

参 考 資 料

- 『子どもの人権力を育てるー尊敬を軸にした人権保育』 玉置哲淳 著 解放出版社
- 『人権プロジェクト支援ガイド』
アン・ペロ／フラン・デイビッドソン 著 玉置哲淳・戸田有一・橋本祐子 編訳 解放出版社
- 『四・五歳児の人権保育ーはぎしりを共感することから』 八木桂子 著 玉置哲淳 解説 解放出版社
- 『乳児の人権保育ー乳児の遊びを通して』 中筋金子・玉置哲淳 編著 解放出版社
- 『「気づき」からの支援スタートブックー幼児の困難サインを上手にキャッチする』
伊丹昌一 編著 閑喜美史 著 明治図書
- 『みんなちがって、つながる・ふかまるー障害共生保育への招待』
戸田有一・山本淳子・森本優子・椎葉正和 編著 解放出版社
- 『まずは子どもを抱きしめてー親子を虐待から救うネットワークの力』 加藤曜子 朝日新聞社
- 『人権保育のための絵本ガイドー子どもが輝くために』 (特非) ちゃいんどネット大阪
- 『子ども虐待防止 予防と援助ー保育実践への提言』 (特非) ちゃいんどネット大阪
- 『多文化共生社会の保育者』 J.ゴンザレスーメナー著 植田 都・日浦直美 共訳 北大路書房
- 『多文化共生への保育ー保育・行事を見直す』 (特非) ちゃいんどネット大阪
- 『聴こえますか子どもの思いと声』 (特非) ちゃいんどネット大阪
- 『いま、どんなきもち？』 ポスター 大阪府人権教育研究協議会
- 『いま、どんなきもち？』 (特非) ちゃいんどネット大阪
・コミュニケーションカード (中) (小)
・ふいーころ ・シール
・きもちのパペット
A (笑う・怒る) B (泣く・悲しむ)
- 『子どもの姿から創りあげる人権保育カリキュラム』 (特非) ちゃいんどネット大阪
- 『子どもの目線に立った人権保育研修ハンドブック』 (特非) ちゃいんどネット大阪
- 『からだ・ことば・リズム』 リズムと表現の会編集 社団法人子ども情報研究センター
- 『ふれあいあそびからの出発』 天野忠雄 著 子ども情報研究センター 編 明石書店
- 『こどものあそびをキャッチ〜ごきげん編〜』
社団法人子ども情報研究センター 子どもとあそびのネットワーク 双葉堂
- 『あそんで感じて・子どもとともに』 社団法人子ども情報研究センター 子どもとあそびのネットワーク
- 『子育て温泉〜新しい子育て・子育て支援〜』 社団法人子ども情報研究センター 双葉堂
- 『窓をあければ〜暮らしの中のジェンダー話』 糸数貴子・新垣 栄、他2人 著 ボーダーインク
- 『NHKテレビテキスト 歴史は眠らない ニッポン母の肖像』 香山リカ 日本放送出版協会
- 『おかあさんがもっと自分を好きになる本ー子育てがラクになる自己尊重トレーニング』
北村年子 著 学陽書房

ご感想・ご意見をお寄せください

FAX 06-6210-9286

大阪府府民文化部人権局

人権学習シリーズvol.10『ありのままのわたし 大切なあなた ～子どもと保護者のエンパワメント～』

今後の参考にさせていただくために、以下の質問にお答えください。

(1)この冊子は、どのような場で使われましたか？

(2)この冊子をお使いになった感想やご意見をお書きください。

ご協力ありがとうございました。

■ 人権学習シリーズの紹介

人権学習シリーズvol.1～vol.9及び入門ガイドは、人権について学び考えるための教材として刊行されています。vol.10と併せてご活用ください。



人権学習シリーズvol.1
『結婚？幸せ』



人権学習シリーズvol.2
『働く』



人権学習シリーズvol.3
『暮らす』



人権学習シリーズvol.4
『ちがいのとびらー多様性と受容ー』



人権学習シリーズvol.5
『ぶつかる力 ひきあう力ー対立と解決ー』



人権学習シリーズvol.6
『同じをこえてー差別と平等ー』



人権学習シリーズvol.7
『みえない力ーつくりかえる構造ー』



人権学習シリーズvol.8
『わたしを生きるーアイデンティティと尊厳ー』



人権学習シリーズvol.9
『あたりまえの根っこー社会の意識とわたしの価値観ー』



人権学習シリーズ入門ガイド
『初めてのファシリテーター』

■ 教材作成委員

栗本 敦子

(Facilitator's LABO 〈えふらぼ〉)

棚田 純子

(特定非営利活動法人ちやいんどネット大阪)

しめだ

ト田 真一郎

(常盤会短期大学)

南田 安紀子

(社団法人子ども情報研究センター)

表紙・イラスト 伊東 直子

事務局 人権教育教材作成等業務共同企業体

(一般財団法人大阪府人権協会、特定非営利活動法人ちやいんどネット大阪)

発行日 2014年3月発行

編集 人権教育教材作成等業務共同企業体

一般財団法人大阪府人権協会

〒552-0001 大阪市港区波除4-1-37

HRCビル8階

TEL 06-6581-8613 FAX 06-6581-8614

URL <http://www.jinken-osaka.jp/>

特定非営利活動法人ちやいんどネット大阪

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

アネックスパル法円坂

TEL 06-4790-2221 FAX 06-4790-2223

URL <http://www.childnet.or.jp/>

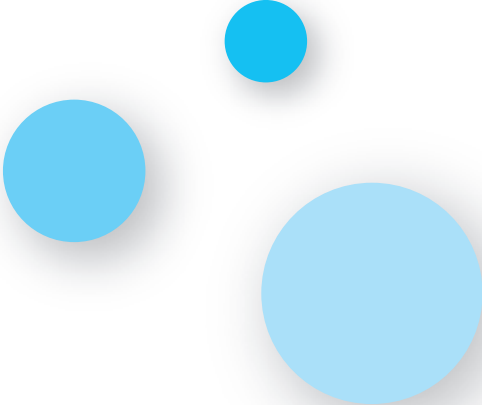
発行 大阪府府民文化部人権局

〒559-8555 大阪市住之江区南港北1-14-16

大阪府咲洲庁舎38階

TEL 06-6210-9281 FAX 06-6210-9286

URL <http://www.pref.osaka.lg.jp/jinken/>



編 集 ● 人権教育教材作成等業務共同企業体
一般財団法人大阪府人権協会
特定非営利活動法人ちゃいんどネット大阪
発 行 ● 大阪府府民文化部人権局